

<http://www.music-communication.com>



神戸女学院大学

TCM

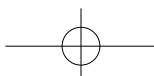
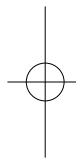
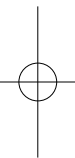
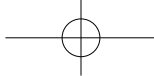
TCM
Tokyo College of Music
東京音楽大学

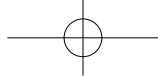
音大連携による教育イノベーション

音楽コミュニケーション・リーダー養成に向けて

2024 年度 活動報告書

このプロジェクトは文部科学省 平成 21 年度 大学教育充実のための戦略的大学連携支援プログラムに選定されました。

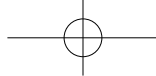




2024年度 活動報告書

目次

はじめに	2
教員・スタッフ紹介・2024年度活動概要	3
2024年度「ミュージック・コミュニケーション講座」	
1. 第1回 ワークショップという学びの拡がり	4
2. 第2回 音楽が人と社会をつなぐ～コミュニケーションの源＝打楽器からの視点	6
3. 第3回 ひらかれた音楽教育の可能性と課題	8
4. 第4回 太鼓から広がる世界	10
5. 第5回 インクルーシブシアター～外なるバリア、内なるバリア	12
6. 第6回 ようこそ先輩シリーズ①：パリよりこんにちは2 諦めない美の探究と芸で得る、表現力の術を身につけよう	14
7. 第7回 ようこそ先輩シリーズ②：音楽の仕事ができた3つのポイント&結婚出産のリアル	16
8. 第8回 ようこそ先輩シリーズ③：音楽と教育を『つなぐ』一つの生き方 ～音楽を幅広く捉えてみたら～	18
9. 第9回 即興は怖くない！～模倣と発展”まね”から始める即興の楽しみ～	20
10. 第10回 芸術とともに共生社会の扉をひらく	22
11. 第11回 神戸女学院大学 実習報告	24
12. 第12回 共生社会における芸術の役割～ Nature Centered の視座の獲得	25
13. 第13回 東京音楽大学 実習報告	27
14. 第14回 総括	28
各大学実習報告	
1. 東京音楽大学 第14回みないけキッズアーティスト「音大生とつくる！夏のおんがく日記」	29
2. 東京音楽大学 「2024年度特別セミナー」ならびに 音楽作りワークショップ「音大生と一緒に音楽をつくろう！」	30
3. 神戸女学院大学 2024年度「ワークショップ入門（1）・（2）」	33
4. 神戸女学院大学 第12回「音楽作りワークショップ特別研修」ならびに 「音で遊ぼう！子どものための音楽作りワークショップ」	36
おわりに	42



はじめに

東京音楽大学と神戸女学院大学音楽学部とが連携して取り組んできた共同プロジェクト「音大連携による教育イノベーション 音楽コミュニケーション・リーダー養成に向けて」も、2009（平成21）年のスタートから数えて16年目となりました。

今年度は、「音楽とともに共生社会の扉をひらく」という全体テーマの下、教育学、作曲、舞踊、即興演奏、インクルーシブ・ワークショップなど、多様な分野で活躍されている講師をお迎えして、座学や実践による充実したご指導をいただきました。その中で、「共生社会」という概念自体の孕む問題についての鋭い批判もいただきました。

9月には、ロンドンのギルドホール音楽院から講師2名を招聘して、東京音楽大学と神戸女学院大学で音楽作りワークショップの特別研修を行いました。楽譜のない音楽の世界に不慣れな学生たちは、戸惑いながらも、皆でイメージを膨らませて音楽的なアイデアを出し合い、それらを組み合わせ一つ一つの作品へと構築していくクリエイティブ・ミュージックの醍醐味を、味わいました。

今年度も、さまざまな形で活動を理解して支えて下さった皆様に、心より御礼申し上げます。1年間の活動内容をまとめた本報告書を、音楽・芸術・教育に関わる方々にご高覧いただき、未来に向けてのご助言をいただけましたらありがたく存じます。

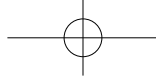
2025（令和7）年3月

津上智実（神戸女学院大学 名誉教授）

*開講科目名

ミュージック・コミュニケーション講座 A・B（東京音楽大学）

ミュージック・コミュニケーション講座（神戸女学院大学）



教員・スタッフ（令和7年3月現在）

東京音楽大学	武石 みどり 赤木 舞 坂本 夏樹 小酒部 愛優美	東京音楽大学音楽学部	教授 非常勤講師 非常勤講師 連携センタースタッフ
神戸女学院大学	津上 智実 小林 瑠那 玉置 華	神戸女学院大学音楽学部	名誉教授 連携ルームスタッフ 連携ルームスタッフ

令和6年度の活動

●ミュージック・コミュニケーション講座の実施

今年度の全体テーマ「音楽とともに共生社会の扉をひらく」

オリエンテーション：令和6年4月12日（金）	発信校：東京音楽大学
第1回：令和6年4月26日（金）	発信校：東京音楽大学
第2回：令和6年5月24日（金）	発信校：神戸女学院大学
第3回：令和6年6月7日（金）	発信校：東京音楽大学
第4回：令和6年6月21日（金）	発信校：神戸女学院大学
第5回：令和6年12月7日（金）	発信校：神戸女学院大学
第6回：令和6年7月26日（金）	神戸女学院大学のみ
第7回：令和6年7月28日（金）	神戸女学院大学のみ
第8回：令和6年11月1日（金）	神戸女学院大学のみ
第9回：令和6年11月22日（金）	発信校：東京音楽大学
第10回：令和6年11月29日（金）	発信校：神戸女学院大学
第11回：令和6年12月6日（金）	発信校：神戸女学院大学
第12回：令和7年1月10日（金）	発信校：東京音楽大学
第13回：令和7年1月17日（金）	発信校：東京音楽大学
第14回：令和7年1月24日（金）	発信校：東京音楽大学

●その他の活動

- 令和6年9月8日（日）於：区民ひろば南池袋
第14回みないけキッズアーティスト「音大生とつくる！夏のおんがく日記」
- 令和6年9月13日（金）～16日（月・祝）於：東京音楽大学
「2024年度特別セミナー」ならびに音楽作りワークショップ「音大生と一緒に音楽をつくろう！」
- 令和6年5月31日（金）・7月19日（金）於：神戸女学院大学
2024年度「ワークショップ入門（1）・（2）」
- 令和6年9月18日（水）～21日（土）於：神戸女学院大学
第12回「音楽作りワークショップ特別研修」ならびに「音で遊ぼう！子どものための音楽作りワークショップ」

2024年度 第1回「ミュージック・コミュニケーション講座」

講座の名称	第1回ミュージック・コミュニケーション講座 「ワークショップという学びの広がり」
講師	荻宿 俊文（青山学院大学社会情報学部教授）
実施日時	2024年4月26日（金）14：10～15：30
実施場所	東京音楽大学 中目黒キャンパス C400（講座発信校：東京音楽大学） （Zoomで神戸に同時配信）
講座の概要	<p>第1回「ミュージック・コミュニケーション講座」は、毎年講師としてお招きしている青山学院大学社会情報学部教授の荻宿俊文氏の講義であった。荻宿氏の専門は、学習コミュニティデザイン論、学習環境デザイン論、教育工学で、特に学校教育で展開されているアート系ワークショップの調査研究をされている。2009年に青山学院大学ワークショップデザイナー育成プログラムを立ち上げ、ワークショップデザイナーの人材を輩出してきた。今回は「広がったワークショップとは」「ワークショップの定義」「ワークショップセンスを磨く」の3つをテーマとしてご講義いただいた。</p> <p>はじめに、現行の学習指導要領においてこれまでと異なる点として、対話的という要素が入ったことを指摘し、グループワークで生まれる学びは「協働的な学習≒ワークショップ」であることを示した。また、社会の問題を解決するには、問題解決能力や批判的思考力が重要であると述べ、アメリカのミネルバ大学で実践されているアクティブラーニングを紹介した。決められたテーマについて、予習を前提としたディスカッション形式の授業で、学生同士の活発な議論を通して考え方を学ぶという新しいスタイルである。日本にはない授業スタイルに学生たちは驚いていた。荻宿氏は、社会の課題を解決する上で一番大事な方法はコミュニケーションをとること、そして、社会に貢献する専門性が必要であると述べた。さらに演奏家の専門性については、自身の専門分野のスキルと共に、専門以外の幅広い分野の知見も併せもつT型の専門性が必要であると述べ、T型の専門性を得るには、コミュニティ形成の越境的専門性を備えたアーティストをめざすべきであると語った。また、現在の社会状況として、日本が直面している超高齢化社会、未婚・一人暮らしの社会の到来、生涯賃金の低下等の問題を示し、従来の安心なコミュニティであるはずの家庭、地域、職場に揺らぎが生じており、我々には第3の場が必要であると述べた。第3の場を構築するには、社会課題に向き合う経験や上から目線ではなく対等な意識が大切であり、「T型専門家はコミュニティ形成の越境的専門家・アーティストとして活躍できる。どんどんユニットを組んで、おもしろいことを考えてほしい」と学生たちにエールを送った。</p> <p>続いてワークショップの特質について、正しい答え（正解）だけではなく、自分が納得した答え（納得解）に意味があると述べ、参加者に代替不可能性感覚を失わせないことが重要であると伝えた。実際に、学生たちに好きな色を聞く質問をした上で、間違えた人を指差してという投げかけをすることで、「間違いがない問いがある」ことを実感してもらった。このことをふまえ、ワークショップの定義について、方法・前提条件・範囲・デザインの特質に関する解説があった。荻宿氏は、ワークショップを実施するにはコミュニティ形成（仲間づくり）のための他者理解と合意形成のエクササイズ（練習）が前提</p>

講座の概要

条件であるとし、誰もが参加できること、双方向性を確保することが重要であると述べた。こういったワークショップに関する概念は、助成金等の申請時の事業内容の説明に役に立つとのアドバイスもいただいた。

最後に、ワークショップの場面における「協働性」「身体性」「即興性」「自己原因性感覚」の4つの視点について、体験型ワークを交えながら説明された。協働性の前提としてケアリング=互助性が埋め込まれていること、身体は「心」のセンサーであることをワークで体感した後、カタルタというカードを使用してグループでストーリーを即興的に作るワークを行った。学生たちは楽しみながらワークを体験し「ワークショップセンスを磨くには、おもしろがるセンスが必要である。とりあえずやってみる、ダメならやり直すだけのこと」という荻宿氏の言葉を実感していた。

まとめとして荻宿氏は、演劇やダンスはワークショップが進んでいるが、音楽はこれからであると述べ、音楽の専門家としてのキャリアだけでなく、社会デザインのなかで専門性を活かす越境音楽を実践してほしいという学生たちへのメッセージで講座を締めくくった。

〈学生のことば〉

・今回の授業ではワークショップの拡がりを考える意味や、アーティストが何故コミュニケーションを求められるのかを学ぶことが出来ました。また好きな色を答えて「間違えた人を指さしてください」という問いは、最初は違和感があったのですが、答えが自分の中にあることを知り、自分が会得した答えに意味があることを伝える大切さがありました。
(東京 / MBT / 1年)

・この講義から、代替不可能性感覚について学びました。正しい答えだけが正解という訳ではなく、自分が納得した答えに意味があるということを知り、それは音楽にも関係していると考えました。一人ひとりの個性を大切に、コミュニケーションを取って、ワークショップを楽しむことが大切だと思いました。また、ワークショップのセンスを磨くためには失敗を恐れずに、おもしろがったり、みんなで楽しめるようなことを進んでやるのが

大切だと思いました。授業で扱ったカードゲームもとても楽しかったです。このような簡単なゲームでは、初対面の方とも楽しめたことが良い経験になりました。発想を広げ、ワークショップでは積極的に会話をするのが大切だと思ったので、これからの授業でも活かして行きたいです。

(東京 / ピアノ / 3年)

・音楽家としてどのように演奏活動をしていけばいいかヒントをもらった授業でした。音楽家は世間から反対されたりすることが多い職業のように感じていましたが、先生は専門性が高い素晴らしい職業だとおっしゃっていて、少し未来が輝かしく思えました。赤ちゃんからご年配の方、クラシックが好きの方や音楽にあまり興味がない方、色々な人がいる世の中で、音楽家を必要としている人は少ないかもしれないけど、1人でも多くの人に音楽を届けられることが出来るようになりたいと思いました。
(神戸 / ハープ / 1年)



※写真は東京音楽大学での様子です。

2024年度 第2回「ミュージック・コミュニケーション講座」

講座の名称	第2回ミュージック・コミュニケーション講座 「音楽が人と社会をつなぐ～コミュニケーションの源＝打楽器からの視点」
講師	野尻 小矢佳（打楽器奏者）
実施日時	2024年5月24日（金）14：10～15：30
実施場所	神戸女学院大学 音楽学部合奏室（講座発信校：神戸女学院大学） （Zoomで東京に同時配信）
講座の概要	<p>第2回の「ミュージック・コミュニケーション講座」は、打楽器奏者の野尻小矢佳氏を講師に迎えた。野尻氏は、複数地域の連携事業や各種公演のプロデュース、研修講師も務め、音楽を通じた繋がりや醸成にも力を入れている。（一財）地域創造・公共ホール音楽活性化事業登録アーティスト。</p> <p>今回の講義では、打楽器の文化をはじめ、アウトリーチ活動で大切にしていること、共生社会について野尻氏が感じていることを中心にお話された。</p> <p>打楽器は宗教からスタートしているものが多く、土着的民族リズムが多いのが特徴だ。また、ボールを使ったり走ったりなど、楽器ではないものにも必ずリズムがあり、それを取り出して音楽の仲間に入れること、また楽器ではないものも楽器として使用するところが、打楽器の特性の一つだと語った。</p> <p>次に、口伝を用いた神々へのリズム曲を演奏した。演奏後は「口伝のリズムは楽器が出来上がって、音が集まって、音楽が生まれて、どうやって繋がってきたのかなど、コアなところが伝わる作品の一つである」と話した。</p> <p>アフリカ民謡の曲は口伝に近いところがあり、口伝の文化の中にもコール・アンド・レスポンスの手法や、お祭りのダンス・リズム・歌など、真似をすることで音楽が発展していく文化がある。それを学生にもぜひ体験してほしいということで、足踏みや手拍子を用いながら、アフリカ民謡の曲と一緒に演奏した。「リズムや音楽と一緒に作るという意味では、打楽器は根源的なコミュニケーションの源であり、アウトリーチやワークショップを行う時には、打楽器にしかできない良さがたくさんある」と述べた。</p> <p>次に、野尻氏の大学時代の思い出の曲を演奏した。 【演奏曲目】S. ハドキンソン《ケルベロス》</p> <p>演奏後は「視点だけではなく、見る角度を変えることで、自身が発見できていないことが見つかる。この曲は自身が音楽に向かう時、日常生活の中で視野を広げるきっかけになった曲だ」と話した。大学卒業後は、根拠のない自信と挑戦の繰り返しだったという。年齢を重ねると色々なものが見えてくる代わりに、怖さもたくさん見えたという。「根拠のない自信は原動力になる。この先いろんなことに挑戦すると思うが、怖がらず扉を開いてほしい」と話した。</p> <p>野尻氏は地域創造の公共ホールを主体とした財団でアウトリーチ活動にも力を入れている。いろんなホールの方と関わることもあり、「地域の良さと問題点」を確かめ、情報を得ながら作っていく経験ができるという。この財団に入ったことで、自身のアウトリーチ活動に力を入れていきたいと思うきっかけになったそうだ。</p> <p>野尻氏が考えるアウトリーチでの大切なことを4つ挙げた。1つ目は、一緒に過ごすこと。目的やゴールに行き着くことも重要だが、その時間・空間を分かち合うことが大事である。2つ目は、ヒントの種まき。答えは参加者自身が見つかる</p>

講座の概要

もので、説明や提示は問いかける状態で終えて、後は参加者が音楽で何を感じるかが重要である。3つ目は、信じること。子どもたちや参加者に先入観を持たずにフラットに接すること、そして何より自分自身を信じること。何もできない無力さ、そして何かできるかもしれないという強さの両面を持つことが重要である。4つ目は、待つこと。間の取り方などは人それぞれのタイミングで違ってくる。感じる時間、呼吸の間、音楽の演奏面。これはワークショップやアウトリーチの時など、全体的に言えることではないかと述べた。

次に、ユニバーサル事業に取り組む「Smile Music」の活動について話した。活動の主軸は、2011年の東日本大震災のチャリティー活動から始まり、その後も、年齢制限なしの公演、体験型公演など、ユニバーサルな演奏活動も行なっている。この活動で大事にしていることは、フレキシブル、そして丁寧さだという。また、事前の打合せで、どれだけ情報を入手できるかなども大切にしている。それを踏まえて準備をすることで、その場にフィットしたものが生まれるのだと述べた。

野尻氏が「共生社会とはどんなものなのか」と考えた時、以前、心理学の授業の中で聞いた「誰かにとって必要なものは、誰かにとって不自由なものになり得る」という言葉が浮かんできたそうだ。到達点は、お互いを想って、みんなが過ごしやすい場所をめざすことだ。例えば、掲示物や案内など情報を得ることで安心する人はいるかもしれないが、逆にそれによって過ごしにくくなる人もいる。その程よいバランスとは何なのか。また、音楽の中ではバリアフリー公演というものがある。この公演にも問題点があり、システムの問題や、全員にフィットするものではないかもしれない。今はまだ発展途上の公演で、大まかに誰でも楽しめるという印象。しかし、これから先はもっと特化して、もう少しそれぞれにフィットするものが出来てくるのではないかと述べた。

最後に「共生社会となった時に単一の答えはないが、相手の気持ちや、社会の動きなどいろんな視点を含めた上での想像力と共感力が必要だと思う。その中で音楽を通して、一緒に過ごすとなった時には、さらに温度感、距離感も重要ではないか」と語った。

〈学生のことば〉

- ・ 普段、打楽器を演奏することはなく、音で聞くことくらいしかなかったのが新鮮で楽しかったです。知らない打楽器や演奏法が次々に出てきて、野尻さんが伝えたいことがダイレクトに伝わってきて、自分も新しい発見になりました。たった一つの音から音楽が始まり、それが周りに伝わり、音楽の輪が広がっていくのがこんなにも楽しく、おもしろくて、音楽の力はすごいと学びました。

(神戸 / フルート / 1年)

- ・ 人の意見を尊重する＝同じ意見を持つ、賛成すると思ってしまう人も少なくないと思います。言葉の伝え方で、違った意見も棘なく伝えることができるし、個人の考えを常に持つことの重要性も再確認できました。授業は学習者と指導者という一方的な関係ではなく、学習者が中心となるような

形が理想です。私が指導者にまわる時にはぜひ意識しようと思いました。(東京 / ピアノ / 3年)



※写真は神戸女学院大学での様子です。

2024年度 第3回「ミュージック・コミュニケーション講座」

講座の名称	第3回ミュージック・コミュニケーション講座 「ひらかれた音楽教育の可能性と課題」
講師	佐野 靖 (東京音楽大学 音楽文化教育専攻 特任教授)
実施日時	2024年6月7日 (金) 14:10 ~ 15:30
実施場所	東京音楽大学 中目黒キャンパス C400 (講座発信校: 東京音楽大学) (Zoom で神戸に同時配信)
講座の概要	<p>第3回の「ミュージック・コミュニケーション講座」では、東京藝術大学の教授として長年音楽教育に携わってこられた佐野靖氏をお迎えし、「ひらかれた音楽教育の可能性と課題」というテーマで、社会と繋がる音楽教育についてお話していただいた。</p> <p>はじめに佐野氏は「可能性とは多様性のことだと考えてほしい」と述べられた。さらに、「音楽教育の可能性とは個人の中の多様性を拓いていくことが重要なのではないか」という問いかけから講義を進められた。</p> <p>まず音楽教育の概念として、「音楽教育とは、さまざまな音楽経験を通して学習者が音楽的・人間的に成長を実践していく過程」と定義された。現場は時代と共に常に変化していくため、過去の実績だけを研究するのではなく、現状の様子を知ることが大切であり、佐野氏自身も常に現場の様子を学びとり、研究者として言語化することで音楽教育を進めていると述べられた。</p> <p>続いて、音楽教育とはさまざまな領域や分野と関わり合っていると説明された。例えば、「発達教育」「脳科学」「デジタルアート」など多様な領域や分野と関わりながら、音楽教育の方法を生み出していくことができるとのこと。また音楽教育の対象は子どもから高齢者まで幅広く、教育者自身の興味のある分野を活かすことができるため、自らの興味や可能性を耕していくことが重要であると語られた。これらのことを踏まえると、目的を達成するために音楽を活用すること全般が音楽教育となり、その範囲は幅広いことがわかる。</p> <p>また、教える（教わる）だけでなく、学び合うことができないと音楽教育とは言えないのではないだろうかとの指摘。佐野氏は指摘する。教育者も常に反省的実践をしながら学び合っていくことが大切であり、これは「音楽（演奏）」の本質そのもののサイクルと同様であると述べられた。</p> <p>次に、ひらかれた音楽教育の事例が紹介された。熊本の小学校では大学と連携・協働で歌づくりのプロジェクトを行った。子どもたちから短い詩と、メロディーを募り、それを作曲家がまとめ、歌唱指導なども行った上で小学生たちが披露。後に中国語へ翻訳もされ、日中文化交流へと繋がったとのこと。同じく熊本の高校では総合的な探求のプロジェクトとして地域と連携し、音楽コースの学生が街中でイベントを開催した。メインイベントとして地域の人々に歌詞を募集し、学生たちが歌パートと楽器パートの作曲を行った。学生たちはイベントを通して地域の人々や行政・企業との交流を経験することとなった。</p> <p>最後に、「日常」と「非日常」の重要性について話された。非日常のイベントがあることで、日常の積み重ねの成果が発揮される。例えば、コンサートや発表会、ワークショップ、地域との協働プロジェクトなど、学生にとって非日常が貴重な機会となる。近年の学校生活ではカリキュラムや予算などにより「非日常」の出</p>

講座の概要

来事が減ってきているが、日常を大切にしながら非日常の音楽教育活動にも力を入れていきたいと締め括られた。

講義後は日頃の悩みも含めて質問の時間が設けられた。その中で、「自分に興味がないことでも降ってきた仕事は引き受けるべきなのか？」という質問が挙がった。この質問に対して佐野氏は、「船に帆を立てれば、風が吹いた方向へ進むもの」と答えた。また、「失敗を繰り返すことで成長に繋がるので、できることだけに囚われずに挑戦することで可能性が広がることもあるのでは」とアドバイスされた。これは音楽教育だけでなく、どのような学びやキャリアにも取り組む考え方はないだろうか。今回の講義では音楽教育が社会とどのように関わって、どのように発展していくべきかを学ぶことができたと共に、「挑戦することの重要性」についても深く考えさせられた。

〈学生のことは〉

・今回の講義を聞いて、音楽教育は「実践の学」であり、さまざまな領域・分野と関わり合っているという観点について演奏活動は通ずる部分があるなど感じました。私は大学に通いながら演奏家として活動していますが、並行しながら教えることもしている為、いろんな視点から講義を聞くことができ学ぶことができました。今後の活動に役立たいです。
(東京 / 声楽 / 4年)

・今回の講義で、音楽教育の深い可能性とその課題について理解が深まりました。特に、「教える＝学ぶ」の理念や日常と非日常の結びつきが、音楽教育の本質をより豊かにする要素であると感じました。また、実際の学校や地域での音楽プロジェクトの事例から、音楽教育がどのように社会と繋がり、個々の多様性を尊重しながら共同体を形成する力を持つのかを実感しました。
(東京 / MBT / 1年)

・今回の講座で「自分の型を作るには小さな失敗を繰り返すしかない」という言葉が1番印象に残りました。これは音楽教育だけではなく、人生において大切なことであると思う。失敗を恐れてばかりで何も出来ないより、小さな失敗を繰り返す

ことで自分だけに見えるものや、考え方が生まれてくるのだと思う。繰り返す失敗の中で、何がこの失敗に繋がったのかを自分なりに考えて改善しようと努めることで成果へと繋がると思いました。
(東京 / ピアノ / 4年)

・佐野先生の授業を受けて、新たに音楽の視野が広がりました。音楽に関すること以外にも共感するところや考えさせられるところがたくさんありました。世間や一般社会にはまだ浸透していない音楽のアウトリーチがもっと社会に知られていくようになればと思いました。一般社会がどのようにしたら音楽に目を向けてくれるのかをただ考えるのではなく、自分からアピールしたり、広げて行こうと思いました。
(神戸 / ピアノ / 1年)



※写真は東京音楽大学での様子です。

2024年度 第4回「ミュージック・コミュニケーション講座」

講座の名称	第4回ミュージック・コミュニケーション講座 「太鼓から広がる世界」
講師	時勝矢 一路（太鼓表現師）
実施日時	2024年6月21日（金）14：10～15：30
実施場所	神戸女学院大学 音楽学部合奏室（講座発信校：神戸女学院大学） （Zoomで東京に同時配信）
講座の概要	<p>第4回「ミュージック・コミュニケーション講座」は、太鼓表現師の時勝矢一路氏を講師に迎えた。時勝矢氏は大阪芸術大学演奏学科打楽器専攻を卒業後、関西フィルハーモニー管弦楽団のアソシエイトプレイヤーを経て大阪交響楽団の正団員となる。同時期に和太鼓に出会い、関心を持つ。指揮者の指示のもと演奏するオーケストラとは違って、和太鼓は一人ひとりが観客と対峙することに魅了され、『鬼太鼓座』に入座する。</p> <p>鬼太鼓座は長崎の雲仙にて活動していた。当時の座員は外国人や地元の人など、プロとは言えない人々の集まりだったが、ランニングをはじめとした基礎体力トレーニングを徹底的に行っていた。これまでのオーケストラでの学びが根底から覆され、とにかく体力を必要とされた。時勝矢氏の所属時、ボストンマラソンに出場しゴール直後に大太鼓を叩くというパフォーマンスを行ったことがあるそうだ。それが故小澤征爾氏の目に留まり、ボストンシンフォニーホールにてオーケストラと和太鼓のための曲を演奏し、その後日本にて逆輸入的に演奏の機会を得たことが鬼太鼓座の日本デビューのきっかけとなった。鬼太鼓座は“走楽論”を活動の根源としており、和太鼓の演奏において体力を重要視していることが大いにわかる。</p> <p>知的障がい者によるプロの団体『瑞宝太鼓』の指導にあたることになった際、時勝矢氏は彼らのために熟練の演奏家でも演奏がむずかしいレベルの曲を作り、それを提げて指導に向かった。新曲《漸進打波》は、締め太鼓・中太鼓・桶胴・大太鼓・篠笛の5つのパートから成る。また、全員が同じリズムを叩くユニゾンの部分もある。時勝矢氏の指導は基礎の徹底から始まった。続いて、新曲の練習も佳境になってきた頃、瑞宝太鼓は時勝矢氏の自宅にて合宿を行った。メンバー12名が稽古場で寝泊まりし、曲の完成をめざした。彼らはその足で東京の和太鼓コンテストに向かい、第2位を獲得する。</p> <p>学生時代に障がい者と関わった経験から、瑞宝太鼓の指導に工夫を持たすことができたと言及。日本には昔から、リズムを口で伝承する口唱歌という文化がある。瑞宝太鼓のメンバーに曲を伝える際、楽譜ではなく口唱歌を用いると、彼らは曲に取り組みやすかったという。</p> <p>瑞宝太鼓のメンバーはそれぞれ特性があり、演奏レベルの差もあれば、できないことの差もあるという。そんな中で、その人の持っている器を埋めるのが自分の役割だとして指導に当たっていたそうだ。しかし、その器より多い分を注ぐと溢れてしまい、彼らはパニックに陥る。時勝矢氏は何度もその境界を探っていった。</p> <p>国内のみならず海外での活躍も目覚ましい時勝矢氏だが、学生時代は同学科の学生らと馴染めず、あまり経験を踏めなかった。卒業後オーケストラに入団し、そこで見捨てずに何度も声をかけていただいたことで成長できたという。その少</p>

講座の概要

し辛い記憶は、瑞宝太鼓のメンバーに指導する時の『絶対に見捨てない』との想いのベースとなっている。

知的障がいや発達障がいを持つ人々には特有の集中力があるという。時勝矢氏が瑞宝太鼓の指導に出向いた日は丸一日ほとんど休まずに稽古をし、終わると倒れこむ。適度な集中力の切り替えがむずかしいことから起こることだが、その分驚異的な成長を遂げる。また、小さな会場であろうが大きな舞台であろうが、彼らはリハーサルから全力で演奏し、太鼓を叩くこと自体に喜びや誇りを持っている姿は、聴衆の心に響く。

時勝矢氏は、一人ひとり異なる特性を強烈な個性だと捉えている。まだまだ偏見が残るが、知的障がいや発達障がいをもつ人々は、心が清く純粋な性格の人が多いという。はじめて関わるときは戸惑うこともわかるが、恐れずに接してみたいと時勝矢氏は訴えた。

〈学生のこぼれ〉

- ・今回時勝矢さんのお話を聞いて、今後どのように音楽と向き合うかを自分の中で見つめられました。時勝矢さんが大学入りたての時に打楽器についてあまり知らなかったという話について思ったことは、時勝矢さんは自分が周りから責められたりしても、自分のやりたい音楽を貫いて楽しみながら演奏を重ねたということが、「音楽を楽しむ」という音楽家の精神がその頃から備わっていてすごいなと思いました。今回の時勝矢さんのお話を聞いて、自分も間違えた音を出すのを怖がるのではなく、どんどん自分の思うような音を出せるように積極的に楽しんで演奏しようと思いました。また、障がいを抱えている人たちに教える時も楽しくわかりやすく伝えられるように工夫して教えたという話も聞いてすごいなと思いました。自分の言っていることを理解してもらえない時、何度も同じように教えてしまうことが多いので、時勝矢さんを見習って私も相手がどうしたら理解できるのか、相手の立場に立って物事を考え柔軟に対応できる人になりたいと思いました。
(神戸 / チェロ / 1年)
- ・今までさまざまな経験をされた時勝矢先生のお話は貴重だと思いました。太鼓一つで世界が広がり、国境を越えて繋がりをもっているのは凄いことだと感じました。ただ楽器を扱う、ただやるだけでは意味がなく、自分で考え、音楽そのものを自分のものにするまでの道のりに意味があるのだと思いました。障がいの有無に拘わらず人々と関われるのが音楽のすばらしさだと思いました。リズムを言葉で覚えるのが楽しかったです。
(神戸 / ピアノ / 1年)

- ・今回の講義で、自分たちがワークショップを行うときや障がい者と接するときに意識すべきことを学ぶことができました。「相手に少しずつ教え、相手のキャパを超えないように、相手を見捨てずに育てる気持ちで」という考え方は障がい者だけでなく、子供や高齢者をはじめとした参加者全員に向けるべき意識だと感じました。リズムに言葉を当てはめて教えるといった技法は次の講義の発表や実際のワークショップで実践したいと思いました。
(東京 / MBT / 1年)
- ・和太鼓は、かなり技術や力が必要なものを感じていたため、障がいのある人々への支援や、交流に繋がること少し意外性を感じました。
(東京 / MLA ピアノ / 3年)
- ・知的発達障がいのある人たちで組んでできた太鼓の団体があるという話を聞きました。今まで私は知的発達障がいのある人が周りにいたことがなくて、関わったこともないので、あまり想像ができませんが、障がいのある人の挨拶のお話を伺って、そんな純粋な方たちの演奏を聞いてみたいなと思いました。
(東京 / ピアノ / 3年)



※写真は神戸女学院大学での様子です。

2024年度 第5回「ミュージック・コミュニケーション講座」

講座の名称	第5回ミュージック・コミュニケーション講座 「インクルーシブシアター～外なるバリア、内なるバリア」
講師	中山 夏織 (NPO 法人シアタープランニングネットワーク代表)
実施日時	2024年7月12日(金) 14:10～15:30
実施場所	神戸女学院大学 音楽学部合奏室 (講座発信校: 神戸女学院大学) (Zoom で東京に同時配信)
講座の概要	<p>第5回「ミュージック・コミュニケーション講座」は中山夏織氏を講師として迎えた。中山氏は、プロデューサー・翻訳、NPO 法人シアタープランニングネットワーク代表。アートマネジメント・文化政策・英国演劇・アーティストサバイバル等を教える傍ら、さまざまな国際交流・人材育成事業に携わる。日本のインクルーシブ・シアターのパイオニアとして海外にも知られる。</p> <p>今回の講義では、舞台芸術で鑑賞するという環境に適応できない人々・疎外されている人々の存在について詳しくお話された。</p> <p>障がいとは、社会が社会的に抑圧される人々を考慮せず、社会の主流の活動から締め出されることで生じる、不利益や活動の制限である。私たち自身が障がいというものを作ってしまったのではないか。どうすれば良い環境が作れるのか、変われるのかを考えていきたいと語り出した。</p> <p>アッテンボロウ報告書『芸術と障がい者』・イングランド芸術評議会『障がいを持つ観客に対して』のガイドラインを読み返した際に、驚いたことがあった。二つの報告書には『知的障がい者の鑑賞』という言葉が一つもなかったという。知的障がい者が観賞することが想定されておらず、芸術参加は促進されても、鑑賞については考慮されていなかったのだ。</p> <p>疎外された人たちが劇場を訪れやすくするために作られた公演を、リラックス・パフォーマンスという。この公演を行うには、劇場スタッフや出演者の全面的な協力を得ることが必要だ。公演担当のスタッフは、事前にトレーニングを実施し、観劇に先立って、障がいの種類や程度、必要とされるケアについて担当者と議論も行う。事前資料を提供したり、客席体験を行ったりすることもあるが、今となっても課題はあり、万全ではないのが現状だ。しかし、リラックス・パフォーマンスにも適応できない人々はある。はじめての場所や、多くの人の前などが苦手な知的障がい者の家族は、自分たちが鑑賞できるとは考えていないのだ。</p> <p>次に、イギリスの劇団オイリー・カートについてお話された。この劇団は、35年以上にわたり、さまざまな障がいに対応した作品を提供し、世界中に影響を及ぼしてきたと言われている。彼らの劇団では「楽しい・美しい」ということを提供している。また、「楽しいかどうか・ありのままの子どもたち」を受け入れた公演を作っている。それにはどのようなケアが必要なのか、どのように鑑賞したいのかと、事前に確認をすることを大事にしている。このような演劇がオイリー・カートの劇団では、今でも受け継がれている。イギリスでは、障がいを持つ俳優が増えており、演劇に出演するのが当たり前になっている。また、バリアフリー化は義務であり、率先して社会にアピールすることが芸術家の役割だと考えている。</p> <p>日本では2013年に、厚生労働省と文化庁の初の協働による懇談会が実施された。懇談会は、あくまでも障がい者の美術造形活動への支援を目的としたもの。中山氏は</p>

講座の概要

初回に足を運び、文化庁の担当者に「舞台芸術はない」と言われた。この結果は私たち側の問題でもある。美術に関わる人々は、政治に働きかける活動をしてきたが、舞台芸術に関わる人々は、まだ誰も働きかけていなかったのだ。しかし、オリンピック開催がきっかけとなり、鑑賞サポートの増加や身体障がい者へのバリアフリー化などさまざまなことが進んだ。

日本でもリラクスパフォーマンスは進んできており、中山氏も実際に日本版を鑑賞したが、「リラクスが出来ない」と感じたという。さまざまな身体障がい者の為の、鑑賞サポートが勢揃いであったが、「これだと普通の公演でいいのではないか」と思ったそうだ。全体的に大音量の公演で、知的障がい者にとっては鑑賞しづらい環境であり、「誰のためのリラクスパフォーマンスなのかが、まったく分からなかった」と話した。

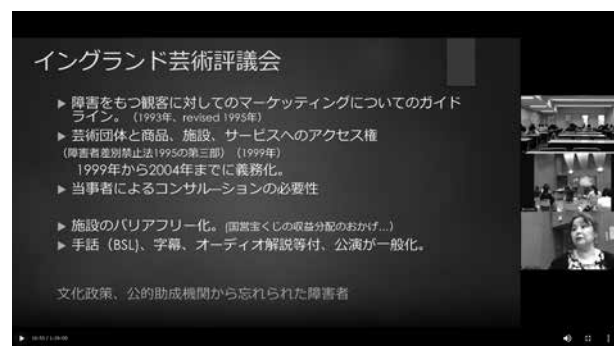
オイリー・カートから学んだことをベースに始めた事業が、「ホスピタルシアタープロジェクト」だ。特色としては、リラクスできる客席作り、家族との鑑賞を重視している点だ。事前に子どもの名前、年齢、配慮事項などを確認し、創造としては劇作家や演出家を置かず、参加しているアーティストでワークショップを作るというもの。その理由は、アーティストが提示したこと以外の想定外なことが起きた時の対応をするため。つまり、アーティスト自身で判断する責任感を持ってほしかった。中山氏は学生に、ホスピタルシアターの事例の写真を見せ、「みんなと一緒に楽しめること、家族の絆や、家族の思い出を作ることができる公演だ」と強調した。しかし、参加者がきっかけで特別支援学級など、色々な方面から依頼が増えしており、大人や高齢者を対象とした公演をしてほしいという声も挙がっている。アーティストの継続性、文化庁職員関係が公演に訪れていないこと、受益者数の壁など、まだまだ問題点があるのが現状だ。

最後に「聞き慣れない言葉や、分からないところもあったと思いますが、皆さんがこの問題を受け入れるという姿勢に変えてくれるだけで、良い方向に向かっていく。今日お話したことを少しでも思い出してもらえればと思います」と講座を締めくくった。

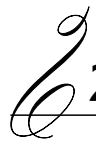
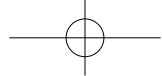
〈学生のことば〉

- ・ はじめて知る舞台芸術の形でした。中山さんが考えていらっしゃる舞台のあり方がよく伝わりました。障がい者の方でも舞台を楽しめるようにする工夫など、全てが新鮮でおもしろかったです。舞台の小道具を触ったり、作品の中に入り込むことが出来たりするのは、貴重な体験だと思いました。
(神戸 / ピアノ / 1年)

- ・ 障がい者との交流の仕方や触れ合い方など、音楽を通じてさまざまなことができるということを改めて感じました。本日の授業で、音楽は人と人を結ぶ鍵となることを実感し、自分に何ができるのか考えるきっかけを生み出すことができました。
(東京 / 管楽器 / 3年)



※写真は神戸女学院大学での様子です。



2024年度 第6回「ミュージック・コミュニケーション講座」

<p>講座の名称</p>	<p>第6回ミュージック・コミュニケーション講座 「ようこそ先輩シリーズ①：パリよりこんにちは2、 諦めない美の探求と芸で得る、表現力の術を身につけよう」</p>
<p>講師</p>	<p>唐澤 まゆ子（メゾ・ソプラノ歌手、神戸女学院大学音楽学部卒業生）</p>
<p>実施日時</p>	<p>2024年7月26日（金）14：00～15：30</p>
<p>実施場所</p>	<p>神戸女学院大学 音楽学部合奏室（神戸女学院大学でのみの授業）</p>
<p>講座の概要</p>	<p>「ようこそ先輩シリーズ」として、昨年に引き続き唐澤まゆ子氏にお話いただいた。唐澤氏は1993年神戸女学院大学音楽学部声楽専攻を首席で卒業、同年パリ国立高等音楽院声楽科に入学。在学中に指揮者ウィリアム・クリスティに見出されヨーロッパデビュー。2004年ブルーメール賞、デビュー・オブ・ザ・イヤーを受賞。その後バロック・オペラを中心に、ヨーロッパ各地の劇場や音楽祭等で演奏活動を行う。</p> <p>昨年の講義後、学生から「楽譜や先生から教わる以外に、自分の表現力というのはどのように付けたらよいのか」という質問が多く出た。それをふまえて今回お話いただいた。</p> <p>大学卒業後、留学をめざしていたわけではないそうだが、自分の好きな音楽がどのように表現されているのかということに興味があり、肌で音楽を感じたいとヨーロッパに旅をした。実際に各国をまわった中でフランスの空気が自分に合っている感覚を抱き、そこではじめて先生や学校を探し始めたという。</p> <p>在学中にバロック音楽に出会い、手書きの原譜の発掘・研究や演奏、更には革命時代のフランス音楽も研究演奏し、それを機に東京でデビューを果たす。しかし自身の声の変化を感じ、再びフランスに拠点を移す。以来、結婚や出産を経ながら演奏活動を行う。</p> <p>日々さまざまな活動をするにあたり、周りに引っ張ってくれる人は必要だという。家族や友人、憧れる先輩、有名人など、活力や刺激になる人は重要である。共感してくれる人や憧れる人など、ジャンル関係なくいろんな人からエネルギーを得て、少しずつ要素を取り入れることで、好きな自分が形成されると考える。</p> <p>また、コロナ禍で人と関わるのが少なくなったと感じるという。人との接し方がわからず恐れてしまうかもしれないが、待っているだけでは何も始まらない。失敗しても良いから、自分から前に一歩出ることが大切だと語る。それは自分の表現を探すことにも繋がる。あるいは他の人との感じ方の違いに気づいたり、新たな感覚に触れることで、さらに自身の表現の幅が広がる。</p> <p>忘れてはいけないのは、自分を消してしまわないことだと強く訴える。自分とは合わない先生について、それがどんなに素晴らしい方だとしても、自分を変えてまでその先生についていこうとすることは危険だという。自分が持っている個性を支えてくれるサポーターに最適な先生を追い求めることが重要である。</p> <p>ここで唐澤氏は、受講生に自己紹介を求めた。専攻楽器のほかに、その楽器を専攻することになったきっかけ、MC講座を受講した理由、そして音楽のほかに好きなことを聞いた。音楽以外の好きなことも大事にすると良いという。音楽業界では演奏することは当然であり、その他にどんな特技や強みがあるのかを求められる時代になっている。時代による需要の変化や、自分自身の成長による変化</p>

講座の概要

もある。その中でも自分の好きなことの興味を深めていくことで、音楽表現との良い相互作用が期待できる。広い視点を持つことで、その場に合わせた音楽でのアプローチの方法に種類を持たせられるようになる。

神戸女学院大学音楽学部は、2024年度から音楽キャリアデザイン専攻が新設された。演奏する人のサポートやプロデュースなど、多面的に音楽と関わる人材を育てる。唐澤氏は主に演奏家として活動しているが、他にも音楽療法や指揮、後進の育成なども行う。表舞台で活躍するだけが音楽ではない、それを多方面から支える人々がプロフェッショナルであることは重要だという。音楽との関わり方は決して演奏するだけではない。

最後に、表現の違いをテーマに唐澤氏に演奏いただいた（伴奏：濱口真理子）。

【演奏曲目】F. プーランク 《Les chemins de l'amour 愛の小径》

山田耕筰 《彼岸花》

G. ビゼー 《カルメン》より〈セギディーリャ〉

〈学生のことば〉

- ・唐澤さんの情熱に圧倒されました。勇気が大事だと、失敗しても挑戦することの大切さに一步踏み出せて嬉しかったです。実は演奏することにあまり乗り気ではありませんでした。レッスンでもみてももらってなかった曲で、上手く弾けるかもわからなかったからです。ですが短調の重い曲なら表現できると思ったので挑戦しました。こんな機会はあまりなく、嬉しかったです。もっとピアノと一体化できるようになりたいです。

(ピアノ / 1年)

- ・目の前で歌を聴くことができ、鳥肌が立ちました。長いビブラートや感情の表現、特に心を込められている箇所もプロだなと思いました。

(ピアノ / 1年)

- ・活躍されている方のお話を聞くことができ、貴重な機会でした。唐澤さんの音楽に対する思いや考えの全てがすばらしく私も音楽と正面から向き合いたいと思いました。

(ピアノ / 1年)

- ・もっと自分の音楽が作れるように、そして将来どう活躍したいかを改めて考えていきたいと感じました。

(ピアノ / 1年)

- ・顔、手、足など全身を使って音楽は表現できるということを学んだので、これから私も自分の魅せ方を学んでいきたいです。

(ヴァイオリン / 1年)



※写真は神戸女学院大学での様子です。

2024年度 第7回「ミュージック・コミュニケーション講座」

講座の名称	第7回ミュージック・コミュニケーション講座 「ようこそ先輩シリーズ②:音楽の仕事ができた3つのポイント&結婚出産後のリアル」
講師	丹野 桃子 (神戸女学院大学音楽学部卒業生)
実施日時	2024年 7月28日 (金) 14:00 ~ 15:30
実施場所	神戸女学院大学 音楽学部合奏室 (神戸女学院大学でのみの授業)
講座の概要	<p>第7回「ミュージック・コミュニケーション講座」は「ようこそ先輩シリーズ」の2回目として、丹野桃子氏を講師に迎えた。丹野氏は2016年に神戸女学院大学音楽学部を卒業、続いて2018年同大学院を修了。その後、同大学アウトリーチ・センタースタッフを5年間務めたのち結婚、昨年春に出産し一児の母である。</p> <p>現在子育て真っ只中だが、ピアノ講師、リトミック講師、コーラスの伴奏などさまざまに音楽活動をされている。ほかにも学生のころ頃、ブライダルの演奏、レストランでの演奏、ロータリークラブ例会ピアニストなどに加え、通常の伴奏や自身のソロ演奏、アウトリーチなど、多岐に亘って音楽活動をされてきた。</p> <p>学生時代は一般就職を考え、学内の就活セミナーを受けたこともあった。舞台の裏方を志望したが、そこで関わった演奏者を羨ましく思うことに気づき、演奏を仕事にしようと思ったと言う。</p> <p>音楽を仕事にするにあたり、自身の経験を踏まえて3つのポイントを挙げられた。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 演奏できる×なにか 私の演奏を求めるきっかけや強みとなるもの 子どもの相手ができる、演奏時間の自由を利かせられる、初見やコードで演奏できるなど 2. やりたいことを他人に言う 自分の中だけで理想を描いていても他人は気づかない あらかじめ周囲に表出しておく、いざという時に声をかけられやすい 3. 自分でつくる 自分で演奏の場を作るのが一番手っ取り早く、目的がはっきりしている 結婚・出産を経た後に戻る場所づくり 子どもがいる生活で融通を利かせられるように 演奏だけでなく企画から経理まですべて自分で行うのは大変 <p>何かをしたいと思ってもすぐ実現できるわけではなく、チャンスをつかむ力も重要だと語る。特に演奏の機会は依頼によるものがほとんどであり、学生のうちから音楽業界以外の人とも関わる意識を持つことできっかけが広がる。また、興味のあることを実現している人と実際にコンタクトを取ってアプローチすることも有効だという。</p> <p>ワーク① 自分と向き合ってみる</p> <ul style="list-style-type: none"> ・音楽でのあなたの強みは？ ・音楽以外でのあなたの強みは？好きなことは？ ・あなたが音楽でやってみたいことは？

講座の概要

今思いついていても、今後変わっていくことも大いにある。それを常に周囲に伝え続けることが大事だと強調する。

丹野氏は学生時代から、音楽をしながらも子どものいる人生を望んでいた。結婚をしても自分のしたい仕事をする、妻である前に一人の人間として生きたいと願っていた。実際は、大変ではあるが楽しく仕事をし、それを夫に応援してもらって続けられている。仕事に対して前向きな姿勢をアピールし、やりたいことを貫く。概ね理想通りだという。

子どもを育てるにあたって、母になってもキラキラと仕事をしていきたいという理想を抱いていた。しかし、実際は仕事と子育ての両立はむずかしく、幸せだがしんどい時も多い。働きたいが、子どもとの時間の大切にしたいという矛盾が生じる。出産によって気持ちに大きな変化があったという。大人同士の結婚と違い、子どもは予想できないことが多く、自分でコントロールできない。出産前に理想としていたことが必ずしもベストではないと感じたという。仕事量は多くなくとも、子どもを預ける段取りや移動、練習にも時間がとられる。何かを選択する場面になった時、誰しもが選ばなかった方を一度は想像する。それでも選んだことが正解になるよう行動することが大事だと語る。

ワーク② あなたの人生について

- ・人生計画
- ・人生で大切にしたいこと
- ・「こうはなりたくない」と思うこと
- ・ワーク①のやってみたいことはいつまでに実現させたいか

最後に、母となって得た新たな目線や実情を踏まえ、現在の自身の“妄想”を語り、アイデアや協力を求めた。近い先輩の講義は学生の興味を強く惹いた。

〈学生のことは〉

・音楽家として働いている方のリアルな結婚のお話を聞くことができおもしろかったです。私が今まで師事してきた女性の先生方はみんなご結婚されてお子さんもいらっしゃるの、ぜひ私の先生方にも聞いてみたいと思いました。

(フルート / 1年)

・将来どういう道に進みたいかまだわからないので、活躍されている先輩の口からさまざまな職について聞けたので良かったと思いました。私も結婚式場でピアノの伴奏をするのをできるようになりたいです。

(ピアノ / 1年)

・同じ女性としての重要な話が聞けてとてもためになりました。すべてが興味のある内容だったので、真剣に考えることができました。結婚のことなどプライベートのことも答えてくださって、やはり自分から行動するということは何においても重要だと思いました。(ヴァイオリン / 1年)

・丹野さんの音楽に対する考えがすばらしく参考になりました。卒業後の事とかがまだ何も分からず不安もあるので丹野さんのお話も少し頭に入れつつ将来を考えて行きたいです。音楽をやっていくには人との繋がりが大切だと感じました。

(ピアノ / 1年)



※写真は神戸女学院大学での様子です。

2024年度 第8回「ミュージック・コミュニケーション講座」

<p>講座の名称</p>	<p>第8回ミュージック・コミュニケーション講座 「ようこそ先輩シリーズ③：音楽と教育を『つなぐ』一つの生き方 ～音楽を幅広く捉えてみたら～」</p>
<p>講師</p>	<p>門脇 早穂子（兵庫教育大学大学院准教授、神戸女学院大学音楽学部卒業生）</p>
<p>実施日時</p>	<p>2024年11月1日（金）14：00～15：30</p>
<p>実施場所</p>	<p>神戸女学院大学 音楽学部合奏室（神戸女学院大学でのみの授業）</p>
<p>講座の概要</p>	<p>第8回の「ミュージック・コミュニケーション講座」は「ようこそ先輩シリーズ」の3回目として、門脇早穂子氏を講師に迎えた。門脇氏は、神戸女学院大学音楽学部をピアノ専攻で卒業し、兵庫教育大学大学院修士課程修了、兵庫県下の小・中学校にて音楽教員として勤務後、聖徳大学大学院博士後期課程修了（博士「音楽」取得）。現在、兵庫教育大学大学院准教授。大学院での主な担当授業は「幼児の生活と表現」、学部授業では「保育内容表現論」「幼児と表現」を担当。加東市や西宮市などで、子育て支援や保育所・幼稚園での実践、研究会の講師を務めている。</p> <p>今回の講義では、門脇氏が本学で学んだこと、活動をしている上で大切にしていることを中心に、経験談を交えて多彩な内容を語られた。</p> <p>門脇氏は大学時代、ピアノだけに縛らず、色々な音楽を楽しんで大学生活を送っていた。小学生にピアノを教えるアルバイトもしていたが、そこではピアノだけではなく、楽器を使って「即興で音楽を楽しむ」ということもしていた。その経験は自身にとって良い経験になったという。</p> <p>門脇氏が大学時代、特に力をいれていたことが2つある。1つ目は、音楽を通じた人との繋がり。大学生活では、先輩と積極的に関わることが多い方ではなかったが、ピアノの門下の先輩との交流はあったという。日常の中だけではなく、試験前の試演会や、クリスマス会などでも、いろいろな人と交流ができた。2つ目は、アウトリーチ活動。アウトリーチを学ぶ授業「音楽によるアウトリーチ」を履修するまでは、「演奏さえすればいい」という考えだった。だが、授業の中で、音楽の届け方や企画力、実践力、トーク力など、演奏以外のことを学んだ。これらは、学外での演奏活動において実践的なスキルとして役立つだけでなく、卒業後の演奏家としての在り方を改めて考えるきっかけとなり、思想的な面でも現在の演奏活動に活着していると述べた。</p> <p>大学院時代は、音楽を通じた教育のあり方や、音楽以外の世界を広げたいと考えて、教育の勉強をしている中で、特に教科書のカリキュラムに葛藤があったという。例えば、教科書に「カスタネットの正しい鳴らし方」が記載されているが、それ以外のことは詳しく書いていない。門脇氏は、「その先の工夫をすることについては、どう繋がるのだろうか。また、楽しい音楽って何だろうか」と改めて考えるようになったという。音楽の専門以外の友人増えて、教育のカリキュラムについて「こんなふうにしたらおもしろいのではないか」と一緒に授業を組み立てたりもした。いろいろな人と関わることで、違う視点を得ることができたという。子どもに向けての活動にはおもしろい面があり、興味があるもの・興味がないもの、それぞれに対して、子どもの反応が違って来る。そんなところにスポットを当てて研究したい。</p> <p>兵庫教育大学で講師を始めた頃、「表現とは何か、創造性とは何か」ということ</p>

講座の概要

をより考えるようになった。教育要領の表現の領域では、幼児教育について次のように示されている。「子どもたちが感じたことや、考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする」。門脇氏はこれに対し、大学時代に豊かな感性という言葉は学んだはずだが、改めて一から考える必要があると感じた。次に、事例として、保育園で先生がヴァイオリンを演奏し、子どもたちが自由に動き回る様子の動画を紹介した。視聴後は、「言葉だけでなく、音楽に合わせて、子どもたちが自由に表現している姿に驚いた。表現活動が子どもたちの中で広がっていくことを学んだ」と話した。

門脇氏が音楽との関わり方で大事にしていることが3つある。1つ目は、自分自身がワクワクすること。自分の感性、自身が楽しいと思える音楽を見つけることが重要。また、作られた曲には意図がある。作者の思いに触れ、それを自身でどう表現するかを考えることが大切だ。2つ目は、子どもと一緒に楽しむこと。門脇氏はティンカリングという言葉を使用した。この言葉には、修理するという意味がある。試行錯誤をしたうえで、最初の目的地とは違う場所に進んだとしたら、その新たな終着地を楽しみ、そこからまた新たな場所へと向かっていくこと。これは新たなおもしろい発見へと繋がるため、大事にしていると語った。3つ目は、「音楽+〇〇」。音楽にプラスアルファで身体や人、絵など、音楽以外のものと融合することで新たな物が生まれる。

最後に学生に向けて、今後の人生設計のヒントを以下のように示した。

1. 音楽とどのように関わりたいか→自分を表現できる方法を見つけること
2. 人生における幸せの基準→自分の好きや楽しいを見つけること
3. 強み・特性→自分の専門性（好きなこと、できること）を把握しておくこと
4. 興味がある分野を知る→上の3つを活かせる分野・仕事を調べて、より具体化していく

門脇氏は「自己実現に向けて、少しのきっかけでも一歩踏み出すことが大事。人との関わり、その出会いを楽しみ、時には人の意見に耳を傾けてみること。たとえ出来ないことがあったとしても、新しい何かが見つかり、おもしろい人生に繋がるのではないか」という言葉で講座を締めくくった。

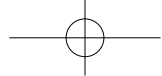
〈学生のことは〉

・「ピアノは向いていない」とご自身でおっしゃっていて、音楽の道に進んだからといってずっと上手くいっていたわけではなく、色々な遠回りをしながらも関わり続けていたエピソードに感激しました。私もこれから神戸女学院で学んでいく中で、諦めずに色々なことに挑戦していく姿勢を、大切にしていこうと今回の講座を聞いて思いました。
(キャリアデザイン / 1年)

・ピアノ専攻ならではのお話が聞けてすごく親近感が湧きました。進路をどうやって歩むか。なりたいたい職業を見つけられるようになりたいです。
(ピアノ / 1年)



※写真は神戸女学院大学での様子です。



2024年度 第9回「ミュージック・コミュニケーション講座」

講座の名称	第9回ミュージック・コミュニケーション講座 「即興は怖くない！～模倣と発展 “まね” から始める即興の楽しみ～」
講師	渚 智佳 (ピアニスト)
実施日時	2024年11月22日 (金) 14:10～15:30
実施場所	東京音楽大学 中目黒キャンパス C400 (講座発信校：東京音楽大学) (Zoom で神戸に同時配信)
講座の概要	<p>第9回「ミュージック・コミュニケーション講座」では、ピアニストであり東京音楽大学の講師でもある渚智佳氏をお迎えした。渚氏は、即興演奏や伴奏付けを学ぶ「ピアノ・プラクティカル・トレーニング」などの授業を担当しており、今回は「即興は怖くない！」というテーマのもと、即興演奏を楽しむための講義をしていただいた。</p> <p>冒頭に渚氏が「即興についてどう感じているか」と聞くと「苦手意識を持っている」と答えた学生が多かったことから、「なぜ即興が苦手なのか？」と問いかけられた。学生からは、「コード進行などがわからないといけないから」「常に先のことを考えていないといけないから」というような内容が挙がったが、渚氏は「そのような点は既存の曲を演奏する時も大切なことであり、共通点なのではないか」と指摘された。</p> <p>次に、デモンストレーションとして、学生から短いメロディーを募集し、それを基に数分間の即興演奏を披露された。演奏後の解説では、メロディーに和音を付ける方法には多くのバリエーションがあることが示され、セブンスやナインズといったテンションコードについても説明された。また、「即興とは、どこかで聞いたことのあるような響きやパターンを組み合わせていくことだ」と引き出しの多さの重要性も述べられた。</p> <p>続いて、即興演奏の練習として、1小節ずつ順番にメロディーをリレーする形式の実践が行われた。この練習では、前の人のメロディーをよく観察し、真似をしつつも変化を加えていくことがポイントとなる(例：上行・下行、リズムや音程のアレンジなど)。</p> <p>次に、単音ではなく和音を使ったメロディーリレーを試してみると、むずかしさを感じて演奏が途中で止まってしまう場面も見られた。これに対し、渚氏は「どんな音になったとしても、音楽を止めないことが大切である」と強調した。</p> <p>さらに、既存曲の和声の上に即興でメロディーを重ねる練習として、モーツァルトのピアノソナタの和声進行を活用しての実践も行われた。</p> <p>最後に、渚氏の伴奏に合わせてヴァイオリン専攻とクラリネット専攻の学生が即興演奏に挑戦する実践も行われた。テーマとなる音や雰囲気、拍子などを簡単に打ち合わせて後に演奏を開始する。最初はお互いに探り合った様子が見られたが、次第に雰囲気をつかみ、アンサンブルを楽しむ姿が見られた。</p> <p>まとめとして、好きなコードの型を選んでメロディーを即興する「遊び」のような取り組みが、長い即興演奏ができるようになるための引き出しを増やすことに繋がると語られた。「真似をするから始まる」という視点から考えると、さまざまなジャンルの音楽や和声の雰囲気を知っていることが、即興の幅を広げることに繋がるのだろう。普段は既に楽譜のあるクラシック音楽の勉強をしている学生たちにとって、新たな音楽の楽しみ方を知るきっかけになったと思う。</p>

〈学生のことは〉

・今日の講座を受けて、現代音楽みたいなものを想像していて即興はむずかしそうだなとずっと思っていました。具体的に何をしたらいいかなどわからなかったからです。ですが、和音のコード進行などヒントがあったり、真似は悪くない、参考にしていいということを知り、もう少し気軽に即興したり友達と弾いてみたいと思いました。
(東京 / 弦楽器 / 2年)

・即興と聞くとかっこよく弾かなくてはと思ったり要らないことを考えすぎてしまい、音楽を止めてしまっていたのですが、真似をすることやパロディなどを聞いて、即興音楽のハードルが一気に下がりました。大事なのかっこよさではなく音楽の流れを止めないということ、怖気付いてやらないのではなく色々なモチーフを借りて演奏することが大切なのだと思いました。この講義のあと、K.545のパロディを家でやってみたのですが、とても楽しかったです。

(東京 / ピアノ / 3年)

・即興演奏をすることは苦手意識があって、なかなか挑戦する気になりませんが、たくさんの曲を知り、少しずつ真似をしていくと良いということが学べたので、私も普段の練習から少しずつ取り込んでいきたいと思いました。ピアノで少し即興演奏をしたときも両手でやるとむずかしくてあまりできなかったのですが、調をしっかりと理解してやっていきたいと思いました。

(神戸 / ヴァイオリン / 1年)

・即興に対して少し嫌な思いと怖い思いがあったが、思い切ってワンフレーズだけでも弾いてみることで音楽が繋がったりするんだなと思いました。先生のように即興ですばらしい曲を作るのはまだまだできないが、少しずつ挑戦していきたいと思いました。

(神戸 / ピアノ / 1年)



※写真は東京音楽大学での様子です。

2024年度 第10回「ミュージック・コミュニケーション講座」

講座の名称	第10回ミュージック・コミュニケーション講座 「芸術とともに共生社会の扉をひらく」
講師	島崎 徹（振付家、神戸女学院大学音楽学部教授）
実施日時	2024年11月29日（金）14：10～15：30
実施場所	神戸女学院大学 音楽学部合奏室（講座発信校：神戸女学院大学） （Zoomで東京に同時配信）
講座の概要	<p>第10回の「ミュージック・コミュニケーション講座」は振付家で本学音楽学部舞踊専攻教授の島崎徹氏を講師に迎えた。</p> <p>島崎氏は、日本での幅広い活躍はもちろんのこと、世界一のバレエコンクールであるローザンヌ国際バレエコンクールにおいて、審査員やコンテンポラリー課題曲の振付を行うほか、アメリカ、パリ、ベルギーなど世界中の一流カンパニーからのオファーが殺到する振付家である。</p> <p>今回で5度目となる島崎氏の講義は、鋭い視点とその熱量で、毎回学生の人気を博している。「芸術とともに共生社会の扉をひらく」をテーマとして、島崎氏が感じていることを熱く語った。</p> <p>「共生社会」とは個々の感じ方で違ってくるのではないかと島崎氏は切り込んだ。特に音楽や舞踊など、皆さんがやっているこの芸術の道を自身で選ぶこと自体が、マイノリティである。我々は、いつのまにか自分自身でカテゴライズ化してしまっているのではないかと。しかし、それは聴いている人や鑑賞する人にとっては関係のないこと。我々のように芸術や音楽をしている人は、カテゴライズするべきではない。つまり我々は曖昧なもの・あやふやなものとして生きる覚悟が必要なのだ。</p> <p>芸術には、救済という役目があると思う。悲しみや苦しみを、芸術の深みをもたらす。島崎氏は、その感情を深めるために、自ら苦しみを求めたりもする。もし、音楽や芸術をしている人みんなが、そのマインドを持っていたとしたら、それだけで大きな共生社会の道に繋がるのではないかと。</p> <p>アーティストは、どんなに不安があったとしても上をめざさなくてはならない。人を動かす力があるなら、自分の愛せることに一生懸命になり、どんな時でも人に手を差し伸べる人になれると私は思っている。私がこの大学に赴任して20年経つが、ここまでやってこられたのは周りの先生が手を差し伸べてくれたり、助けてくれたりしたからだ。しかし、それだけではなく自身の芸術に対するマインドだったり、人に感謝をすることを忘れることは絶対になかった。何か欠けていたとしても、感謝の気持ち、そして自身のマインドをしっかり持っていることで、人は必ず手を差し伸べて助けてくれる。これは本当に重要なことだ。</p> <p>ニューヨークに住んでいた頃、セクシャルマイノリティーの問題、ドラッグなど、色々なことで悩んでいたルームメイトがいた。彼の家族は、彼のセクシャルの問題に対し否定的だったという。彼は自身を責めて苦しんでいたのだと思う。彼がドラッグに手を出していたのは、自分に間違いがあるのだと考え、自身を痛めつけていたのだと今なら思う。アメリカは共同社会を一見理解しているように見える。だが、実際は本当の気持ちは表に出さずに、人種の問題にしても、共存しているように見せているのだと思う。このように人種差別などは、今でもなくなることが現状。人種差別が完全になくなることはむずかしいかもしれない。しかし私は、</p>

講座の概要

皆さんのような若者がこの問題をどんどん世の中に発信していくべきだと思う。いろいろな人間と出会って、色々な人と話しをする機会を作ること。それは皆さんにとっても、これからの芸術活動や芸術というものに色を与えることにも繋がるのではないかと思うと話した。

自分のアートを昇華させるもの、一段でも二段でも上をめざすこと。そして少しでも深みのあるものにして、その道を極めて行こうとする歩みの中に、必ず共生社会というのは存在していると思う。

最後に「自分のやっていることを昇華させるための筋道さえ見つければ、たとえ間違っても、失敗してもどんなに苦しんでも大丈夫なのだということを忘れないでほしい」と島崎氏は熱く学生に語った。

〈学生のことば〉

・島崎先生の勢いは本当に凄いなと思いました。先生はユーモアもあり、いい意味で人とは違っていて素敵だなと思いました。最後の私の質問にも親身になって答えてくださりました。少し体調を崩していたこともあり気分も下がっていたので先生の返答にグッと背中を押されました。私はバレエも習っているので、先生の言う、表現する力だったり、アームスの使い方や姿勢の良さだったり印象的でした。(神戸/ピアノ/1年)

・今回の講座で特に心に残ったのは、「夢は実現できなかつたとしても見続ける」という言葉です。たとえ夢が実現できなかつたとしても、自分がその夢を実現できると信じて行動していたら、それで幸せなのではないか、という考え方が心に残りました。今後、自分で「無理なのかと思いついた夢を否定するのではなく、自分の可能性を信じて夢を壮大に持ちながら努力したいと思いました。(神戸/チェロ/1年)

・マイノリティの話は、自分も興味があったので参考になりました。私は、それぞれその人にしか出せないものがあると思うのですが、根底には覆せない差別意識があるのだなと改めて実感しました。人々の考えを変えることはむずかしいなと思いました。(東京/管楽器/4年)

・今回の講義で、共生社会の本質や芸術分野に求められる共生について学ぶことができました。LGBTQや、障がい者の話など、自分には全くない経験から、共生とは何なのか改めて考えさせられました。自分も音楽に救われて、音大に入学した所があるので、音楽や芸術で共生や救済といったメッセージを伝えていけるアーティストになりたいと思いました。(東京/MBT/1年)



※写真は神戸女学院大学での様子です。

2024年度 第11回「ミュージック・コミュニケーション講座」

講座の名称	第11回ミュージック・コミュニケーション講座 実習報告会（神戸女学院大学）
講師	神戸女学院大学 学生
実施日時	2024年12月6日（金）14:10～15:30
実施場所	神戸女学院大学 音楽学部合奏室（講座発信校：神戸女学院大学） （Zoomで東京に同時配信）
講座の概要	<p>2024年9月18日～21日に神戸女学院大学で実施した「音楽作りワークショップ特別研修」(p.36～39参照)について、神戸女学院大学の履修生が発表を行った。</p> <p>4日間の研修について、アイスブレイクやボディーパーカッションやグループワークの内容を、パワーポイントを用いて報告した。</p> <p>今回のワークショップは、コミュニケーション能力・人と人との接し方・言葉がなくても伝えられる力・瞬発能力に対応する力を身につけることが課題だった。</p> <p>まず今回のワークショップの基盤となった、〈空の1日〉の作曲について発表した。旋律を作るグループと、楽器を用いるグループに分かれて作曲を行い、旋律チームは、想像力が掻き立てられ、円滑に創作活動ができ、自分が先陣を切って提案する大切さを学んだ。楽器チームは、即興で自分の感性に従って演奏をする大切さを学んだことを話した。各グループの曲作りでは、色々なアイデアのやりとりや、音楽ができる楽しさを学ぶことができたと話した。最終日には、〈空の1日〉を子どもたちに発表して、子どもたちにオリジナルの振り付けを考えてもらい一緒に創作したこと、グループワークでの工夫についての説明をしてから、実際に4グループがそれぞれ作った作品を記録映像で鑑賞した。</p> <p>最後に、東京音楽大学の学生から、リーダー役にあたった人や、周りのサポートの仕方などがとてもよかったとの感想を多くいただいた。また、曲作りの際、振り付けをすることになった経緯などの質問が出て、それぞれ質疑応答を行った。発表した学生たちは、事前に資料や映像を集めてパワーポイントを作成し、分担して準備をしていたので、限られた時間内で分かりやすく発表することができた。</p>

〈学生のことば〉

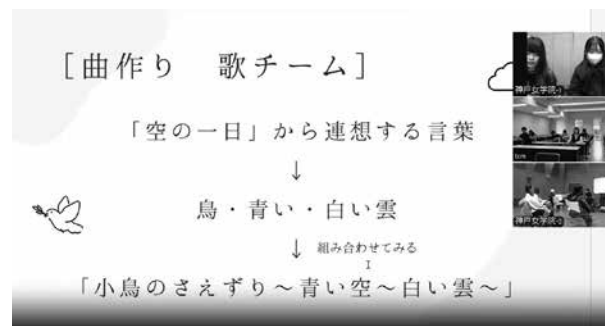
・ワークショップを振り返って、活動したことを伝えることでさらに学んだり、体験したことが自分の身になったと感じました。東京音大の人にどうやったら分かりやすく伝わるかを考えてスライドや文を作る良い機会になりました。

（神戸/ピアノ/1年）

・ワークショップの内容と進行の仕方など東京音大で行ったワークショップと照らし合わせながら振り返ることができた。参加者からアイデアを引き出していくのは勿論、実施者からもアイデアを出していくという互いに対等な関係で作品を

完成させる、理想的な音楽体験のワークショップだと感じた。実際にワークショップをやった体験に加え、今回の講義の内容をこれからの音楽活動やワークショップに活かしたい。

（東京/MBT/1年）



2024年度 第12回「ミュージック・コミュニケーション講座」

講座の名称	第12回ミュージック・コミュニケーション講座 「共生社会における芸術の役割～ Nature Centered の視座の獲得」
講師	近藤 薫 (ヴァイオリニスト)
実施日時	2025年1月10日 (金) 14:10 ~ 15:30
実施場所	東京音楽大学 中目黒キャンパス C400 (講座発信校: 東京音楽大学) (Zoom で神戸に同時配信)
講座の概要	<p>第12回の「ミュージック・コミュニケーション講座」は、東京フィルハーモニー交響楽団 (以下、東フィル) のコンサートマスターであり、東京大学先端科学技術研究センター (以下、先端研) 先端アートデザイン分野特任教授、東京音楽大学の講師も務めている近藤薫氏を講師に迎えた。本講義は、事前に収録された講義動画を2大学同時に流し、最後に学生同士が意見交換を行う方式で実施した。</p> <p>はじめに、近藤氏が所属している東フィルの歴史や事業内容の紹介、先端研の概要と研究活動についての説明があった。先端研は、科学技術を推進する理工学系だけでなく、倫理や思想、社会システムに関わる人文・社会科学系の研究分野が共存している学際的な研究センターである。近年、科学技術とアート・デザインを融合して多様な科学技術を創出する取り組みを行っており、近藤氏は芸術の分野から関わっている。</p> <p>講師自身が、コロナ禍において芸術について問い直したということから、芸術とは何かというテーマで話が進められた。芸術について考える前に、人間とは何かについて、脳内における「認知・理性」と「本能・感性」という2つの構造について解説があった。「認知・理性」は、国家や法律などの概念や科学技術の習得・実践であり、「本能・感性」は、自然界の動物や芸術・創造活動であると述べた。さらに、西洋の理性主義と仏教用語である円融無碍という異なる考え方を提示した。円融無碍とは、すべての事象が完全に解け合っていることを指す。近藤氏は、概して西洋哲学では理性と感性を分けて考えがちだが、東洋哲学では全てを溶け合わせる特徴があると述べたうえで、西洋音楽であるクラシック音楽の行き着く先には円融無碍があると語った。</p> <p>円融無碍について紐解いていくため、近藤氏はクラシック音楽を「近代化との関係」と「知的な音楽」という2つの側面から捉え、それぞれの側面について解説した。「近代化との関係」については、クラシック音楽は政治的変動や産業革命、市民社会の形成や大型ホールの建設などから近代化と共に発展してきたと述べ、音楽史と世界史を融合させながらお話いただいた。また「知的な音楽」については、音価の記譜や教会旋法などを例示しながら、感性に知性で迫る行為、つまり感性を分解し、認知し、再統合する試みであると捉えた。これらのことから、クラシック音楽が西洋の理性主義と繋がりがあることが読みとれた。</p> <p>次に、クラシックの音楽の歴史を1250年のグレゴリオ聖歌から現代まで辿り、歴史的・社会的に重要な楽曲や作曲家について解説した。ここで特に印象的だったのが、今回の講義のキーワードである円融無碍に関わる楽曲としてジョン・ケージの《4'33"》であった。ケージは単に無音の音楽を創ったのではなく、音楽と音楽以外の壁を取り払うことをめざして作品を発表した。コロンビア大学で鈴木大拙の講義を聴講した際に、円融無碍の思想に大きな影響を受けたのだとい</p>

<p>講座の概要</p>	<p>う。《4'33"》は、無音のなかにもさまざまな音が聞こえてくることから、まさに感性を中心とした Nature Centered の音楽であると述べた。西洋音楽であるクラシック音楽の行き着く先には円融無碍がある、ということが腑に落ちた瞬間であった。</p> <p>最後に近藤氏は、世界が近代化してきたなかで、これまでの課題解決のスキームが、ことばや身体を介した認知的コミュニケーション= Human Centered であったのに対し、今後めざすべきは感性を介した生得的コミュニケーション= Nature Centered も重視すべきであると述べた。例えば、環境問題は科学技術のみで課題解決するのではなく、感性を介して課題を抽出し、自然との共生・共存を通して課題解決していくべきだという。認知と感性のバランスが重要であるのだ。感性の側面、Nature Centered の視座において音楽が社会に果たす事例として、自治体との連携によるまちづくりや、蓮華モデルという STEAM 教育を紹介した。学生たちにとっては、人間について、芸術について、そして社会について深く考える機会となり、新たな知見を得られた講座であった。</p>
---------------------	---

〈学生のことば〉

- ・今回の講義では人間の進化とその構築する社会、音楽や芸術の本質、音楽の歴史と社会との関わりという3つから、共生社会とは何なのかを学術的かつ根本的な視点から考えることができた。現在の人々の思考が中世の理性主義と西洋の一方通行的な縦割りの文化に倣っていることに気づくことができた。また脳の構造から人間が持つ芸術性などの感覚的思考はこういった思考によって失われてしまう可能性があることを知り驚いた。この理論から、近藤先生が取り組んでいらっしゃる理性と感覚のどちらも重視するような未来づくりの活動を通して、今までとは違った新たな社会構造やサイクルができていくのだろうと私も思った。自分にはこのような大々的なことができるのかは分からないが、Nature Centered の思考方法を活用したり、ワークショップやインタラクティブな活動に取り組んだりすることでこれからの共生社会の一員として活動していきたいと思う。
(東京 / MBT / 1年)
- ・今回の講義ではこれからの教育についてやクラシック音楽の変遷について学びました。東大先端研での活動は興味深かったです。これからは言葉や身体だけでなく感性が必要という話はとても共感できました。円融無碍という言葉ははじめて聞きましたが、考え方がおもしろいなと思いました。

少しむずかしいですが、すべてのことに繋がりがあって、自由に存在できるというのは物事全てに通ずる考えだと思いました。

(東京 / 管楽器 / 4年)

- ・ジョン・ケージの音楽については、授業で聴いたことがあるのですが、最初はジョン・ケージは音楽の基準から逸脱した楽曲を作ったという印象でしたが、彼は全ての当たり前な基準や物事をそのまま受け取るのではなく、それら全ての調和をめざすべきということをあの曲で伝えたかったのだなと思いました。また、自分の中での当たり前と、周りの人にとっての当たり前は違うと思うので、当たりのことを少しでも疑うことで、少しでも人と人との調和をめざせるのではないかと思います。
(東京 / MBT / 1年)



※写真は東京音楽大学での様子です。

2024年度 第13回「ミュージック・コミュニケーション講座」

講座の名称	第13回ミュージック・コミュニケーション講座 実習報告会（東京音楽大学）
講師	東京音楽大学 学生
実施日時	2025年1月17日（金）14:10～15:30
実施場所	東京音楽大学 中目黒キャンパス C400（講座発信校：東京音楽大学） （Zoomで神戸に同時配信）
講座の概要	<p>第13回は、2024年9月8日に行われた「音大生とつくる！夏のおんがく日記」ならびに2024年9月13～16日に行われた特別セミナー・音楽ワークショップ「音大生と一緒に音楽をつくろう！」について、東京音楽大学の学生から報告した。</p> <p>「音大生とつくる！夏のおんがく日記」を実施した学生と特別セミナーを受講した学生に分かれ、学生が主体で準備したスライドに沿って写真や動画も交えながらプレゼンテーションを行った。</p> <p>「音大生とつくる！夏のおんがく日記」の報告では、当日のワークショップの様子だけでなく、ワークショップに向けた準備の説明もあり、より具体的にワークショップを企画し実施した過程を伝えることができたのではないかと。当日のワークショップ内容については動画も交えながら、各セッションごとに準備していたこと・実際にやってみて感じたこと・実施したことによる気づきを報告した。</p> <p>特別セミナー・音楽ワークショップ「音大生と一緒に音楽をつくろう！」の報告では、最終日の音楽ワークショップを実施した学生を中心に1日ごとに担当を振り分け準備し報告した。自分たちが特別セミナーで取り組んだこと・学んだことを改めて言語化することはむずかしいと感じる学生が多かったが、これまでの授業や特別セミナーでの共通の体験があったからこそ、お互いに助けあい協力して取り組んでいる印象を受けた。</p> <p>普段、言葉を使っただけのプレゼンテーションの機会が少ない音大生ではあるが、今回自分たちの実践や学びを記録から振り返り、再構築して人に伝えた経験はプレゼンテーションへの自信に繋がったのではないかと。</p>

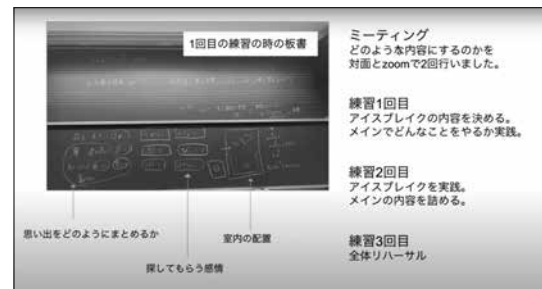
〈学生のことば〉

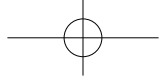
- 東京音大の方と同じようなワークショップを開催したのにも拘らず、作る音楽が神戸女学院と東京音大でまったく違うものになっていて、とてもおもしろかったです。子どもたちの作る曲や曲名が、個性にあふれていていいなと思いました。

（神戸／キャリアデザイン／1年）

- 東京音大の方々の音楽作りのワークショップの様子を見ることができてよかったです。神戸女学院と同じように個性も出ていて興味深かったです。子どものことを気遣っていたり、聞いたりしている姿が印象深かったです。

（神戸／ピアノ／1年）





2024年度 第14回「ミュージック・コミュニケーション講座」

講座の名称	第14回ミュージック・コミュニケーション講座 総括
実施日時	2025年1月24日(金) 14:10 ~ 15:30
実施場所	東京音楽大学 中目黒キャンパス C400 (講座発信校: 東京音楽大学) (Zoomで神戸に同時配信)
講座の概要	<p>最終回となる第14回は1年間を振り返り、東京と神戸の学生がお互いに感想や意見を共有する回となった。</p> <p>学生からは、「教えるのではなく、参加者と一緒に作るという時間の作り方がむずかしかった。教育現場で生かしたい」「自分自身の音楽に対する関心などが高まった。将来自分がどんな音楽家になりたいかを考えるきっかけになった」などの感想が挙げられた。</p> <p>武石先生から、「ワークショップの経験を通して、リーダーとしてどのようなスキルを身につけた方が良いと思ったか、身につけるためにどんなことが必要か」という題が与えられ、4~5人のグループに分かれディスカッションした。</p> <p>学生から挙げられたスキルは「自分が楽しむ気持ちが必要」「コミュニケーション力」「音楽の分析力、音楽史の知識」「即興演奏への積極性」などである。それに対して、身につけるためにどのようなことが必要かという問いに対し、「人前に出て場を回すことに慣れる」「色々な分野に興味をもつ、音楽を言葉で語ること」「民族音楽などからヒントを得ることや、自分の音楽のレパートリーを広げること」などが挙げられた。</p> <p>1年間の講座を通して、学生はより音楽を多面的に捉え、自身のキャリアを考えるきっかけになったのではないだろうか。</p>

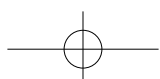
〈学生のことば〉

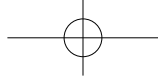
・東京音楽大学の学生と神戸女学院の皆さんと、1年間を振り返って、いかに特別セミナーが我々にとって大きな影響を与えたのかを言語化することによってより実感しました。この授業ならではの、正解がないからこそ、幼い頃感じていた音楽の楽しさをまた取り戻すことができたと思えました。1年間身体を動かしたり歌ったり、とても楽しかったです。(東京/ピアノ/3年)

・今回の講義で両大学の意見や感想を聞いて改めてこの講座を振り返ることができました。何人かが発言していた「音楽を純粋に楽しむことができる」という感想はこのようなワークショップなどの「周りを巻き込み共に楽しむ」活動の音楽分野の強みだと感じました。また音楽を専門的に学ぶ私たちにとって忘れてはならない感覚であるとも思いました。(東京/MBT/1年)

・リズムやメロディを通じて、人々が共感し合う様子は、文化や背景を超えたつながりを生むことを実感しました。また、音楽を通じた対話がコミュニティの絆を深める重要性にも気づきました。音楽の力を活用して、より良いコミュニケーションを図る方法を探求することができました。

(東京/声楽/4年)





第14回みないけキッズアーティスト「音大生とつくる!夏のおんがく日」

(東京音楽大学実習報告)

講座の名称	音大生とつくる!夏のおんがく日記
実施日時	2024年9月8日(日) 14:00~15:30
実施場所	区民ひろば南池袋 多目的ホール
参加者数	東京音楽大学 ミュージック・コミュニケーション講座受講生3名、他学生4名(協力) 区民ひろば南池袋を利用する小学生・未就学児とその保護者 計10名

〈事業概要〉

本事業は、春学期のまとめとして、受講生3名が中心となり、区民ひろば南池袋を管理・運営するNPO法人みみずくの社との共催で実施した。夏休みの思い出から音楽創作をし、「おんがく日記」をつくることをワークショップの目的とした。

今回の実施に向け、受講生が主体となり、内容検討のミーティングを2回、ワークショップに向けた練習を3回行って準備した。事前に準備やリハーサルを行うことで、実際に子どもたちを前にした時の振る舞い方や、声かけの仕方、子どもたちの反応を予測し、内容のブラッシュアップを図った。

導入のウォーミングアップでは、はじめに参加者の様子を観察することや場の一体感を高めるために、リーダーの模倣やリズムのコールアンドレスポンス、名前を全員に呼んでもらうアクティビティを行った。次に、気持ちを音で表現するアクティビティを行った。「嬉しい」「悲しい」「びっくり」の3つの感情にあう音を事前に部屋の中に並べていた小物楽器から探し、発表してもらった。今回のワークショップのメインである「夏の思い出」から音楽創作をするための準備として、子どもたちが感情を音で表現することに慣れてもらうという意図から、このアクティビティを設定した。リハーサルでは、子どもたちがどの感情なら考えやすいか、アイデアが出てきやすいかを考え、子どもたちに提示する感情を吟味した。子どもたちが発表した際に、どの感情と結びつけたのか、それに対しどのようにリアクションを取るかをあらかじめ考えておいたことで、子どもたちの表現を受け入れる場をつくれたと感じる。最後に、今回のテーマである「夏の思い出」の歌をみんなで歌った。受講生がヴァイオリンやチェロでメロディ

ーをリードしたり、オブリガートをつけ、参加者が歌いやすいように音楽的な手助けをした。

その後、参加者に「夏の思い出」を聞き3つのグループに分けて創作を行った。各グループに1~2名リーダーが付き、思い出を深掘して、1日のストーリーをつくった。そのストーリーに合わせて楽器を選び音楽創作し、完成した作品を発表した。発表では、演奏した後ストーリーについて説明してもらい、聞いていた人が感想を言い合う時間をとり、みんなでシェアした。

最後に「参加者の新たな夏の日記の1ページにしてほしい」と声かけし、本ワークショップを締めた。

〈学生のことば〉

・自分たちで企画し、進行することが大変だったが、子どもたちが音楽に触れ創作し楽しんでいる様子を見ることができて楽しかったです。

(管楽器 / 4年)

・自分が前に出て進行役になっていて余裕がなくなっていた時に、他のメンバーがサポートしてくれたのが、とても助かりました。複数人でワークショップをやることの重要性が分かりました。

(弦楽器 / 4年)



「2024年度 特別セミナー」ならびに 音楽ワークショップ「音大生と一緒に音楽をつくろう！」

(東京音楽大学実習報告)

講座の名称	「2024年度 特別セミナー」ならびに 音楽ワークショップ「音大生と一緒に音楽をつくろう！」
講師	デッタ・ダンフォード、ヘザー・トゥルスダル (英国ロンドン市立ギルドホール音楽演劇学校 リーダーシップ修士課程修了生)
企画・司会	武石 みどり (東京音楽大学 教授)
実施日時	2024年9月13日(金) 14:10～15:30 9月14日(土) 17:30～19:00 9月15日(日) 10:00～12:00 / 13:00～18:00 9月16日(月・祝) 10:00～12:00 / 13:00～18:00 最終日の13:00～16:00で音楽ワークショップ「音大生と一緒に音楽をつくろう！」を実施
実施場所	東京音楽大学 中目黒・代官山キャンパス
参加費	ミュージック・コミュニケーション講座受講生・既習生(卒業生含む): 無料 一般の参加者(上記以外): 5,000円 16日ワークショップ参加者: 無料
主催・協力など	主催: 東京音楽大学ミュージック・コミュニケーション講座 協力: 英国ロンドン市立ギルドホール音楽演劇学校、神戸女学院大学 後援: 目黒区教育委員会
参加者数	9月13日(金) 東京音楽大学学生16名、一般2名 9月14日(土) 東京音楽大学学生11名、一般2名 9月15日(日) 東京音楽大学学生10名、一般2名 9月16日(月・祝) 東京音楽大学学生6名、一般2名 ワークショップ参加者: 小学生6名、保護者6名

〈事業概要〉

本事業の目的は、音楽を通して誰もが持っているクリエイティブなアイデアや能力を引き出し、コミュニケーション能力やリーダーシップ等の力を実践的に身につけることである。

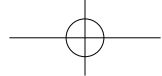
そのため、2024年9月13日から16日までの4日間、英国ロンドン市立ギルドホール音楽演劇学校のリーダーシップ修士課程修了生であり、フルーティストで作曲家のデッタ・ダンフォードとチェリストで作曲家のヘザー・トゥルスダルを講師として日本に招聘し、本学学部生を対象とする音楽ワークショップ特別セミナーを実施した。

9月13日から15日までは受講生を対象に研修を行い、最終日の9月16日には実際に子どもたちを交えた形で、「音大生と一緒に音楽をつくろう！」と題した音楽づくりワークショップを実施した。

1日目は、はじめに講師から自己紹介があった後、セミナーでの心得として、以下の5つが挙げられた。「心を開く、人を批判しない、学ぶ姿勢を持つ、自分たちや他人に気遣いをする、楽しみましょう」また、「間違いはないから相手のアイデアに『いいね』という気持ちを持つことが大切」と受講生に語った。

最初の活動は、全員で円になりリーダーを模倣するアイスブレイクを行った。講師がリーダーとなり体を動かしたり、手拍子や足踏み、声を出す活動をした。

次に、お互いの名前を知るためのアクティビティを行った。はじめにリズムに合わせて順番に自分の名前を言い、コール・アンド・レスポンスにしてお互いの名前を次に動きをつけた。最終的には全員で一人ひとりの動きだけをリズムに乗せて



行い、お互いの名前を覚えることができた。

最後に、楽器を用いたセッションを行った。一人一つ小物の打楽器か自分の専攻楽器を持って講師のリーディングで即興的に演奏した。チェロの提示するビートに合わせた音楽と、特定のリズムをつくらないというルールに基づけられた音楽の2種類が誕生し、1日目は終了した。



2日目もまた、アイスブレイクから始まったが、今日は4日目の子どもたちとのワークショップに向けて、自分達もリーディングを経験する、音楽を作ることを体験することが目標であると講師から受講生に伝えられ、受講生自身がリーダーになりリーディングを体験した。講師からはワークショップをする時ははじめから楽器を演奏せずに、ウォーミングアップ(=アイスブレイクで行うアクティビティ)から始めることで子どもたちの様子を知ることができると説明があった。

次に、音楽創作を行った。4~5人の小グループに分かれて名前の意味をテーマに音楽づくりを行い、出来上がった作品を共有し合った。それぞれ発表し合い共有する際に、よかったところ、思い出したこと、質問などのポイントを見つけることが良いと説明があった。

短い時間であったが、それぞれ違うエナジーが生まれてよかったということで本日のセッションを締めた。



3日目は、2日目に創作した名前からつくった音楽の振り返りから始まった。学生から「メロディ

ーが多いグループと打楽器が多いグループがあったので、合わせたら大きい音楽になると思う」「楽器の特性を深く理解して楽器の組み合わせを考えたりアイデアに沿った音色を選んだりしていきたい」などの意見が挙がった。講師からは、「(音楽創作では)短い間で考えて決めないといけないことがたくさんある。そのため、音楽の構造を考えることが重要。(昨日の創作では)話し合いの過程でお互いの間にリスペクトがある関係ができていたのがすばらしかったと感じた」「『みんなが主役』は大切な考え方だと思う。この考え方で明日は小学生が主役になれる瞬間をつくってあげられるようにしてほしい。主張が強い人や控えめな人など色々な人がいると思うが、一人ひとりが輝ける瞬間をつくるためには(みんなの意見を取り入れられる)余白が必要である。」とアドバイスがあり、4日目のワークショップに向けての練習を行った。

アイスブレイクでは、受講生がリーディングをし、明日のワークショップに向けて、講師から以下のようなアドバイスがあった。

「子どもたちとの活動では、短く今やることの指示をわかりやすく出すことが大切である。一緒にやるためにはアイコンタクトをとって繋がる意識を持つこと、つまりコミュニケーションの練習である。さらに、リーダーはよく全体を聞いて何が起きているかを聞くことが重要である。提案したアクティビティに追加要素を入れて参加者からアイデアを引き出すことができる。」

次に、歌をつくる活動を行った。講師は「歌は誰もがアクセスしやすい音楽の形である」と述べ、明日のワークショップで参加者と一緒に歌うための歌を制作した。まずは講師があらかじめ用意したチェロのベース進行を聴き、そこからイメージを膨らませ、メロディーと歌詞を考えた。その後グループに分かれ、各セクションを制作し繋ぎ合わせた。午後にこの曲を、どうやったらもっと素敵になるか活発に意見交換しあった。センテンスの順番は楽器の演奏を加えるなど、時間をかけてじっくり話し合い、最後は楽器のビートやソロパートを加えた7分に及ぶ魅力的な音楽が完成した。それぞれが、それぞれの音を聞き合いながら、即興的に展開していく様子がすばらしかったと賞賛された。

その後、講師から明日のワークショップのテーマが発表された。

メイン活動は今日作った歌の一部分(「昔々、月

明かりの下で一人歌う])を共有し、歌の続きのストーリーやイメージをテーマに、音楽創作をするワークショップの構成の中で、誰がどこを進行するかを考えた。

各パートの担当を決めて、どんな内容にするかを相談した。はじめてワークショップの進行をする学生も多く、緊張気味の学生もいたが、「誰でもナーバスになる。みんながフォローするし大丈夫」と励ましていた。

4日目の午前中は、午後のワークショップに向けて、3日目で決めた担当ごとに進行の仕方を相談した。進行の仕方が決まってから、リハーサルを行い講師からそれぞれアドバイスを受け、午後のワークショップを迎えた。

午後は音楽ワークショップ「音大生と一緒に音楽をつくろう!」を目黒区在住を中心に小学生6名と保護者6名に対して実施した。会場には多くの打楽器を用意し、受講生がコミュニケーションを取りながら、参加者が自由に楽器に触れる時間を設けた。全員揃った頃に、一つの円になり受講生が中心となりウォーミングアップからスタートした。次に2つのグループに分け、言葉でリズムをつくったり、ダンスを組み合わせる短いボディーパーカッションの創作をした。その後受講生が本日のテーマの歌を披露した。みんなで歌を練習した後、はじめて本日の音楽づくりのテーマが発表され、休憩に入った。

休憩後、保護者を含めて3つのグループに分かれ、それぞれ歌の続きのストーリーを考えて45分ほどで創作をした。

各グループの音楽が完成したところで、各グループの発表を行い、どのようなストーリーの音楽かを説明した。また、この音はどんな意味があったのかなどの質問の時間も設けた。

全てのグループが発表し終わったあと、講師から、各グループの音楽の中で、全員でできる場所



をみんなでやってみようという提案があり、最後に覚えた歌と各グループが創作した音楽を繋ぎ合わせてワークショップを締めた。

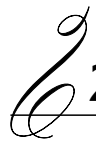
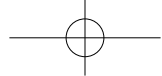
ワークショップが終わった後、4日間の振り返りを行い講師から以下のようにフィードバックがあった。

「お互いを助けようとしていたのがよかった。参加者にとってもプラスになっていた」「グループワークがうまくいった鍵は、ウォーミングアップを丁寧にしたからである。ウォームアップをやる意義をそこに見出してほしい」「どこの段階が抜けても今回の結果は得られなかったから、ワークショップを構築する重要性をわかってもらえたと思う」「ワークショップをできる仲間をつくれる環境・コミュニティをつくれる環境はなかなかないので、これからも大切にしてほしい」と本セミナーを締め括った。

はじめてワークショップのリーディングをする受講生も多い中、実際に子どもたちの前で実践できたことは自信に繋がったのではないだろうか。ワークショップでは子どもたちの自由な発想力に驚きながらも、それを受け入れ、共に作品を作りあげた経験は大きな財産となったことだろう。

〈参加者のことば〉

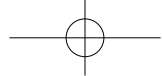
- ・初めて音大に行って、学生の皆さんも優しく話しかけて下さり、憧れを持ったようです。素敵な機会を有難うございました。
- ・いろんなリズムを作れて楽しかった。またいっぱい行ってみたいと思うくらい楽しかったです。



2024年度「ワークショップ入門（1）・（2）」

(神戸女学院大学実習報告)

講座の名称	2024年度ワークショップ入門（1）・（2）
講師	古橋 果林（音楽ワークショップ・リーダー、ファシリテーター） 東 瑛子（神戸女学院大学音楽学部非常勤講師）
実施日時	2024年5月31日（金）・7月19日（金）14:00～15:30
実施場所	神戸女学院大学 音楽学部合奏室（神戸女学院大学でのみの授業）
講座の概要	<p>夏休みに行われる「音楽作りワークショップ特別研修」への導入として、ワークショップ入門講座を2回にわたって行った。</p> <p>1回目は古橋果林氏を講師に招いた。古橋氏は東京藝術大学大学院国際芸術創造研究科アートプロデュース専攻修了後、特別支援学校や高齢者施設、子ども食堂など、乳幼児から大人まで幅広い層を対象にワークショップや参加型コンサートを実施している。</p> <p>音楽ワークショップには明確な定義はなく、さまざまな方法がある。今回体験するものが全てではないことを前提に、まずはやってみようと全員で円を作った。また、合間にそれぞれの活動の意味や意図を解説しながら実践を進めた。</p> <p>はじめに緊張をほぐすアイスブレイクとして、体を叩いたりさすったりする古橋氏の体の動きの真似をするワークを行った。続いて全員で息を合わせて拍手をしたり、拍手を順番に隣に回したりした。5分くらいのことだったが、受講生の雰囲気は柔らかくなった。この間、言葉での説明は最小限で、リーダーに注意を向ける必要がある、というメッセージが参加者に伝わる。続けてリズムに乗せての名前のコール・アンド・レスポンスを行い、互いをより身近に感じられるようになる。これによってその後のコミュニケーションも取りやすくなるという。</p> <p>次に、1は手拍子、2は足踏み…のように、数字にポーズをあてはめ、リーダーの指示のもと再びリズムに乗せて全員でポーズを取った。3以降のポーズはその場で新しくアイデアを募った。特に大人になると、発言することに抵抗がありなかなか案がでないこともあるが、ふとした動きを拾うことで進められるという。これまでは古橋氏がリードを取ってきたが、ここで新たなリーダーの募集が行われた。リーダー体験者は緊張しつつも、リードの難しさや楽しさを感じていた。</p> <p>円の状態のまま、今度は歌での活動に移った。古橋氏が歌を教え、それを全員で歌い、グループに分かれて輪唱する。歌に簡単な動きも加え、短時間で美しいアンサンブルが実現された。一歩円の中に入ったり、歌いながら回転したりすることで、周りの音の聴こえ方に変化がついて刺激となる。</p> <p>リズムから歌と続いて、次はトーンチャイムから好きなものを選び、部屋の中を自由に歩きながら自分のタイミングで鳴らす。互いの音の響きを聴き合いながら、部屋の空間を捉えていく。ある受講生は他の音も聴いてみたくって途中で違う音のトーンチャイムに持ち替えるなど、自由に音を楽しむ様子が見られた。この頃になるとフィードバック時にも意見や感想が出やすくなっていった。</p> <p>最後に、擬音書かれた画用紙を5枚選び、グループに分かれてその5つの擬音に動きをつけて繋げ、それぞれ1つのフレーズを作って発表した。さらに新たな歌とリズムパーカッションを教わり、それらと擬音フレーズを順番に実行して一つの作品が完成した。擬音から動きを生み出すのは、同じ擬音でも人によってかなり違いが出るそうで、小学校などでこれを行うと盛り上がるとのことだ。</p>



講座の概要

ワークショップは色々なやり方がある。古橋氏はワークショップを「リーダー自身が”音楽する”場であること、音楽を通じたコミュニケーションが行われ、人々が繋がる場」と定義する。そのワークショップの目的は何か、どんな場所で行うのか、どんな人が参加するのか、それに合わせて内容を構成する。日々の生活の中からヒントを得ることは多く、アンテナを張っているようだ。今回の受講生は全員ワークショップの経験がなく、はじめは戸惑いもあって消極的だったが、90分後には全員で作品を演奏するまでになっており、大きな変化が見られた。

「ワークショップ入門講座」の2回目は、神戸女学院大学音楽学部非常勤講師の東瑛子氏を講師に迎えた。東氏は、神戸女学院大学音楽学部卒業、同大学大学院、並びに英国ギルドホール音楽演劇学校修士課程リーダーシップ専攻修了。アウトリーチ活動やコラボレーションに加え、音楽づくりやリトミック、即興を用いた音楽プログラムを研究、実践している。

●導入アイスブレイク

参加者で円になって、東氏の後に続いて真似をし、手や足、全身を使って声を出しながら体をほぐした。レクリエーションソングとして歌われる「ギンガングリグリ」を東氏の後に続いて歌った。これによって学生は緊張がほぐれ、積極的に行動し、周りの動きをよく見ながら実践していた。

●コール・アンド・レスポンス

足や胸でリズムを取りながら声を発するワークが行われた。自分または相手の名前をよびながらコール・アンド・レスポンスを行った。声の強弱を意識するようにと指示があった。東氏は、ワークショップとはなぜ円になってやるのかと学生に問いかけ、「リーダー役の人が真ん中に立ち、他の人も同じ土台に立って真似をしたり一緒に作り上げたりする。そこを意識してやってみましょう」と学生に話した。

●ボディーパーカッション

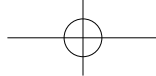
全身を使って、言葉にリズムを当てはめるボディーパーカッションを行った。何度か実践した後は、先ほど歌った「ギンガングリグリ」に動きをつけるとどうなるのかとグループに分かれて創作し、出来上がったものをそれぞれ発表した。全く異なるタイプのものが出来上がり、各グループの特徴があり、個性が発揮された。各グループを比較することで、一人では思いつかない発見に繋がると話した。

●インプロビゼーション

「アマゾンに雨が降る」という曲が紹介された。簡単なメロディーからなる2部構成の曲を全員で繰り返し歌った。そして、学生にこの曲を聴いてどんな風景や物語が思い浮かぶか問いかけ、3グループに分かれてそれぞれ話し合った後、「グループそれぞれのイメージを、楽器を使って音に置き換えてみましょう」と述べ、音楽創作に進んだ。

●楽器に触れて音楽創作

用意された様々の楽器から、好きな楽器を選んで音楽創作が行われた。それぞれの楽器を選んだあと、東氏から実際に音を鳴らす時に、「どんなふうに楽器を鳴らすか、まずは、よく考えて楽器を鳴らしてみてください」との声掛けがあり、学生は合図に合わせて音を鳴らしたり止めたりと試奏をした。次は、自分の楽器と他の人の楽器を合わせてみる即興演奏が行われた。持っているものをいかに組み合わせるか、考えて作るということが重要だと話された。その後は、先ほどの「アマゾンに雨が降る」を再び全員で歌い、楽器も交じえた創作を行った。



講座の概要	<p>●まとめ</p> <p>本日の締めくくりとして、もう一度コール・アンド・レスポンスのワークが行われた後、東氏は「ワークショップというのは、とにかく真似ること。真似るためには相手をとにかくみる。そしてそのまま同調していくこと。それが聞くということに繋がったり、相手を読むことに繋がる。このようにワークショップには、培う物がたくさんつまっているの、今後もいろんな発見を見つけて欲しい」と講座を締めくくった。</p>
--------------	--

〈学生のことば〉

・一コマすべて頭を使ったり、身体を動かしたり、歌ったり、自分たちで音楽を作ったのでとても大変でした。ですが音楽が生まれた時に嬉しい気持ちになりました。私たちもし教える側の立場になった時、授業を教える、授業を作ることはかなり大変なことなんだなと思いました。

(ピアノ / 1年)

・恥じらいを取っ払って音楽と触れ合うことの楽しさを知ることができました。トーンチャイムを使った授業では音の響き、音の振動をよく確認することのできる機会でした。自分が演奏する音もよく聞けたらいいなと思えるような時間でした。

(ハープ / 1年)

・一つのテーマからそれぞれが連想し、音を使って一つの音楽を作ることで、それぞれがイメージしていることや、ものがイメージ出来たり、分かりかえるのは音楽の特徴だと深く思いました。音楽の表現は無限にあり、それぞれのイメージや想像しているものを共有するのが大切だとも思いました。

(ピアノ / 1年)

・ミュージック・コミュニケーション講座を履修してから、こういった音楽の作り方をする経験が増えました。みんなで音楽を作るのはとても楽しいですが、一人で自分の名前個性的にみんなと被らないようにするのは少し恥ずかしく、まだ上手くできないのでいつも苦戦します。チャイムの楽器を鳴らすのが苦戦しましたが、響きがすごく良く音が消えるのを確認するのが楽しいです。

(ピアノ / 1年)



第12回「音楽作りワークショップ特別研修」ならびに 「音で遊ぼう！子どものための音楽作りワークショップ」

(神戸女学院大学実習報告)

講座の名称	第12回「音楽作りワークショップ特別研修」ならびに 「音で遊ぼう！子どものための音楽作りワークショップ」
講師	デッタ・ダンフォード、ヘザー・トゥルスダル (英国ロンドン市立ギルドホール音楽演劇学校 リーダーシップ修士課程修了生)
企画・司会	津上 智実 (神戸女学院大学 名誉教授)
実施日時	2024年9月18日(水) 13:00～16:00 9月19日(木) 9:00～12:00 9月20日(金) 9:00～12:00 9月21日(土) 8:45～18:00 ※「音で遊ぼう！子どものための音楽作りワークショップ」は21日のみ
実施場所	神戸女学院大学 音楽学部音楽館ホール
参加費	神戸女学院生、ミュージック・コミュニケーション講座受講生・既習生(卒業生含む): 無料 一般の参加者(上記以外): 5,000円(全日参加) 子ども: 無料
主催・協力など	主催: 神戸女学院大学音楽学部 協力: 英国ロンドン市立ギルドホール音楽演劇学校、東京音楽大学
参加者数	9月18日 神戸女学院生13名(1年生8名、3年生3名、4年生2名) 卒業生1名、一般1名 9月19日 神戸女学院生13名(1年生8名、3年生3名、4年生2名)、卒業生1名 9月20日 神戸女学院生13名(1年生8名、3年生3名、4年生2名)、一般1名 9月21日 神戸女学院生12名(1年生7名、3年生3名、4年生2名) 卒業生1名、一般1名 子ども14名(小学1年生5名、小学2年生5名、小学3年生4名)

〈事業概要〉

本事業の目的は、音楽を通して、誰もが持っているクリエイティブなアイデアや能力を引き出し、コミュニケーション能力やリーダーシップの力を実践的に身につけることである。

英国ギルドホール音楽院リーダーシップコースの修了生であり、世界で活躍するフルーティストで作曲家のデッタ・ダンフォード氏と、チェリストで作曲家のヘザー・トゥルスダル氏を講師として日本に招聘し、2024年9月18日から4日間に

わたり、本学音楽学部生を対象とする音楽作りワークショップ特別研修を実施した。

9月18日、19日、20日は学生対象の研修を行い、最終日の9月21日には学生の学びの仕上げとして、子どもたちを交えた形で、第12回「音で遊ぼう！子どものための音楽作りワークショップ」を実施した(後者は、本学アウトリーチ・センターが定期開催している「子どものためコンサート・シリーズ」の関連事業として実施)。



ワークショップは全員で円になった状態で進められる。はじめに、今回のワークショップの学びの目標を確認した。1) 新しい音楽はどのように作るか、2) 周りの人と互いに理解し合い、音楽作りを支え合うかの2点である。最終日に子どもたちを迎えるときに、自信をもって活動できることを最大の目標とした。

次に、ワークショップ全体を通して大事にしたい心構えが挙げられた。

- ・互いに開かれた心や耳 (Openness)、好奇心を持つこと (curiosity)、善悪の判断を下さない (non-judgement)
 - ・積極的に学び、楽しみ、創る (Readiness to learn, play and create)
 - ・自分と他者に気を配る (Care for yourself and other)、疑問や不安をなくす
 - ・何よりも楽しむ (Have fun + enjoy ourselves)
- 以上である。

初日の主な目的は楽しんで活動し、互いを知ることである。再び円となり、リーダーに続いて真似をしたり、全身を使って息を合わせる。手拍子や声などを隣に渡していくアイスブレイクを行い、続いて名前に動きをつけたコール・アンド・レスポンスで互いを知り、緊張をほぐした。その後、グループに分かれ、名前から生まれた動きを組み合わせる小さなフレーズを作った。楽器を持ち寄って先のフレーズから連想して音楽を生み出した。

ここで、最初に挙げた心構えに参加者から追加があった。

- ・一度やってみて、それから考える (Try once + try first, then think. Go for it, just do it!)

次に声のウォーミングアップをした後、『アビヨヨー』という短い民謡を教わり、曲から感じた情景や曲に加えたい音などを共有した。夕暮れから夜になるまでの海辺に巨人が寝ている場面を今回の共通のイメージとし、各自、手に取った楽器を用いて、全員でそれに沿う音を探して曲を膨らませていった。

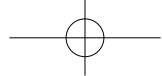
最後に今回のワークショップに期待すること、今日の活動で楽しかったことや挑戦してみたこと、質問や感想などを紙に書いて、活動を終えた。

2日目は学生自身がリードをすることを意識において活動するとした。誰しものが勇気のいることだと認識したうえで、自分の可能性を少しだけ伸ばせるようにと学生を勇気づけた。ウォーミングアップでリーディング、手拍子送り、コール・アンド・レスポンスなどを少しずつ学生が経験した。リーディングをしながらも、参加者が楽しんでいるか、それとも難しく感じているか、様子を観察して全方位に気を配ることが必要である。最終日に学生が子どもたちをリードするに当たっての、リーダーの心構えを教わった。

子どもたちとのワークショップの流れを聞き、その基盤となる曲作りに取り組んだ。はじめに、自分たちが興味を持てるテーマを考えて共有し、その中から〈空の一日 A Day of Sky〉を今回のテーマとした。器楽グループと歌グループに分かれ、〈空の一日〉からそれぞれ連想して作った音楽を合わせて一つの作品とした。これを子どもたちに教える際、誰がどのように伝えるかを決めて、この日の活動を終えた。



3日目は、子どもたちを迎えてのワークショップの細かい流れと、各活動におけるリーダーの役割を確認した。学生自身の興味のあることや得意なことを踏まえて、誰がどの活動のリーダーを担当するかを決めた。全員で円になり、実際に担当のリーディングを行なった。わかりやすいリードの仕方や、役割を交代するときの声掛けなどを教わり、互いに意見を出しながら繰り返し練習した。単純な活動の合間に表情やジェスチャーで参加者にフィードバックをすることで、うれしくなったり興味や集中が高まったりする。言葉で指示を出すときも、シンプルでわかりやすく伝える必要がある。



次に、全員が違うボディーパーカッションを同時に鳴らすセッションから新たな活動を行なった。これはその時々でどんな音が鳴るかわからないという特徴がある。小グループごとにリズムを作り、それらを重ね合わせてリズム・アンサンブルを楽しんだ。アンサンブル中に少しずつリズムを変えるなど、学生たちが自主的に工夫を凝らす場面があり、初日からの変化が見られた。

続いて前日に作った〈空の一日〉を復習し、歌のリードや指示の出し方の練習をした。声のウォームアップも、いかに子どもたちがおもしろがって取り組めるかや、歌を教える際は歌詞のイメージが湧きやすいように身振りをつけるなど、工夫を教わった。また、子どもたちと一緒に創作活動するとき、子どもの意見だけで作ろうとし過ぎるのではなく、リードしている学生自身のアイデアもそれと同様に大切に扱うべきだと講師は語った。子どもたちが恥ずかしがったりして意見が出るのに時間がかかるときは、リーダーがより積極的に案を出して進めていくことになる。あくまでリーダーと参加者は対等な立場であると強調した。



最終日、小学生 14 名を迎えて第 12 回「音で遊ぼう！子どものための音楽づくりワークショップ」を開催した。活動開始前に紙風船で一緒に遊び、自然と仲良くなる姿が見られた。

アイスブレイクではリーダーの動きの真似から始めて、同時に手拍子をしたり、手拍子を隣にまわしていったりするアクティビティまでを行った。この間、リーダーを務める学生が次々と変わること、子どもたちと学生との集中が高まっていった。続いて名前のコール・アンド・レスポンスを行い、リズムや動きもつけた。次に小グループに分かれてそれぞれリズムを作り、それらを重ねることで、子どもたちもアンサンブルを楽しんだ。

休憩を挟んだ後、〈空の一日〉を子どもたちに披露し、この後の活動でこの曲を膨らませていくことを子どもたちに伝えた。歌う準備として、動物

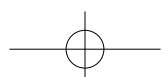


の鳴き声を真似た声のウォーミングアップをし、〈空の一日〉を全員で歌った。再びグループに分かれ、〈空の一日〉から連想することやストーリーの続きなどを自由に紙に書き出した。子どもたちは楽器を選び、アイデアをもとにグループごとに音楽作りに進んだ。

昼休みに学生と子どもたちは一緒にお弁当を食べ、午後の活動を再開した。全員集まって互いの作品を聴き合い、気づいたことやおもしろかったところを伝え合った。同じ〈空の一日〉がテーマでも、着目するポイントや表現が違うということ、子どもたちも感じていた。

〈空の一日〉の歌と各グループの音楽を一つの作品に組み上げる練習が行われた。他のグループの音楽でも、音を出すきっかけや内容を理解することで全員が参加できる。

これらの準備をした上で、ワークショップの集大成として、保護者の方々の前で約 20 分の作品を上演した。緊張した表情も見られたが、子どもたちが一日かけて全員で作った作品を披露する姿は逞しく生き生きとしていた。保護者から感想を聞いた後、一日の振り返りとして楽しかったことや他にやってみたいことなどを、絵や言葉で自由に書いて、締めくくりとした。



〈受講生のことば〉

・最終日に自分たちが小学生に教える立場になったのは、はじめての経験で緊張しましたが、確実に自分の身になったので、貴重な経験ができました。即興演奏もはじめてだったので緊張したし、むずかしかったのですが、これからも即興演奏をする機会があると思うので、この経験を生かしていきたいです。 (ヴァイオリン / 1年)

・4日間で自分で成長を感じれるくらいの体験をできたことがすごく嬉しかったし、勉強になりました。リトミックなどもあまり取り組んだことがなく、型にはまらずに色々なことを生み出す講師の先生方に釘付けでした。とても楽しかったです。 (キャリアデザイン / 1年)

・音楽ワークショップの作り方や、みんなをワークショップへ巻き込んでいく雰囲気作り、また即興演奏など、音楽で人との繋がりを作って一つにすることや演奏面など、幅広いことをこの四日間で学ばせてもらいました。貴重な体験をさせて頂いて、ありがとうございました。 (チェロ / 1年)

・今後、人前で演奏をする機会が増えると思うので、即興演奏をすることになっても、自信をもって演奏することを心掛けます。小学生との接し方も学べたので、一人ひとりが持っている貴重な意見を聞き逃さないように会話をしながら接していきたいと思いました。 (ヴァイオリン / 1年)

〈保護者のことば〉

・半日で仕上げたとは思えないほど、子どもたちもがんばっていたと思います。皆で一つのものをゼロから作り上げるという大変なことを経験できて、アウトプットできるまで仕上げられて感謝しています。

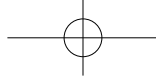
・笑顔で発表会を迎えており、充実した楽しいワークショップだったのだろうと感じています。

・協調性を持って自分の役割を理解し、集中して真剣な表情で演奏に参加していました。のびのび音楽を楽しむことを、これからも続けてほしいと思いました。

・物語を感じられる素敵な音楽に仕上がっていました。「音楽とは何か？」の気づきのある時間になったのではないかと思います。

・一人で参加したのですが、お友達ができたり学生の皆さんをお話したりと、とても楽しそうにしていました。自由に気持ちを音楽で表すことを学べたのではないかと思います。

・他の子が演奏している時も作品に参加しようとしている感じが伝わってきて、みんなと一緒に一日協力して取り組んだ成果や成長が感じられました。



おわりに

平成 21 年度に始動した共同プロジェクト「音大連携による教育イノベーション 音楽コミュニケーション・リーダー養成に向けて」も、満 16 年となりました。その間に、巣立った卒業生たちが地域と連携した取り組みを始め、また多様な場所で音楽ワークショップの特徴を生かした活動を展開していることを本当に心強く思います。

ICT 化が進む社会の中で、「音楽のチカラとは何か」が強く問われています。そして「その力をどう伝えたらよいのか」という問いに対して正解は一つではありません。音楽の専門教育のただ中にある学生たち、そして卒業生たちには、音を奏で、共に聴きあい、共に創り上げる喜びを常に忘れずに、それぞれの道を探してほしいと思います。

今年度も多くのゲスト講師の方々に、講義やワークショップを通して、さまざまな側面で有益な示唆と気づきを与えていただいたことに深く感謝いたします。私は今年度で講座の担当を交替いたしますが、この 16 年間に講座を通して学生たちと共に体験した貴重な時間は、本当に意義深いものでした。今後も本講座がさらなる人材育成に貢献し、より幅広い世代へと新しい音楽教育を発信する源となるように願っております。

末筆ながら、今年度もさまざまな形で活動を理解して支えて下さった皆様に、心より御礼申し上げます。

2025（令和 7）年 3 月

武石みどり（東京音楽大学・教授）

共同プロジェクト
音大連携による教育イノベーション～音楽コミュニケーション・リーダー養成に向けて

2024 年度 活動報告書

2025 年 3 月発行

発行者 東京音楽大学 連携センター
〒 153-0051 東京都目黒区上目黒 1 丁目 9 - 1
Tel/Fax : 03-3982-3227
Mail : music.communication.tcm@gmail.com

編集 神戸女学院大学音楽学部 連携ルーム
東京音楽大学 連携センター

表紙・本文デザイン 上條浩史

